2022 年度子ども食堂団体ヒアリング調査報告書

コロナ 3 年、新たな挑戦へ
持続し、増え続ける子ども食堂

2023 年 1 月

一般社団法人こどもの居場所サポートおおさか

～コロナ３年、新たな挑戦へ

持続し、増え続ける子ども食堂～

一般社団法人こどもの居場所サポートおおさか

昨年度までの調査のふりかえり

1. 2020・21 年度の調査概要 2

2022 度調査　子ども食堂の実態は～アンケートまとめ

2. 今回調査の目的と方法 5
3. 2022 年の全体的な活動状況 7
4. 「食堂」などの活動を通じた子どもたちの変化 10
5. コロナ禍の中での「食堂」活動継続の工夫と悩み 24
6. 弁当配布・パントリー活動のプラスとマイナス面 26
7. 「食堂」のネットワークや「食堂」同士のつながり 28

2022 度調査　活動内容・ネットワークの分析

8. 《分析１》コロナ禍以前・以後の開始でどう違うか 31
9. 《分析２》「サポートおおさか」との関係でどう違うか 37
10. 寄せられた「声」から 39

活動の継続・発展に向けて

11. 「子ども食堂」中間支援のこれから 46
付. アンケート調査票 47

1. 2020・2021 年度の調査概要

コロナ禍の直撃と、「食堂」再開への工夫

- ‘20 年度は会食形式継続が２割、65%が弁当や食材配布に切り替え、１５%は活動停止。「場所」「人手」が継続・再開を阻む。
- ‘21 年度は会食形式を継続・再開した団体が 45%に増え、弁当や食材配布に取り組む団体も増加。
- 「子どもの居場所づくり」を重視する方向と、「困っている家庭への支援」を重視する方向の、ふたつの志向性が見られた。

2020 年初頭から全世界的に流行が始まった新型コロナウイルスにより、同年春の「第 1 波」における緊急事態宣言や夏の「第 2 波」、さらには年末から翌’21 年初頭にかけての緊急事態宣言を伴う「第 3 波」において、子ども食堂の活動は全国的に厳しい制限を強いられた。’21 年度になっても感染者数の山は高くなる一方で、春の緊急事態宣言を伴う「第 4 波」に続き、東京五輪をはさむ 7～9 月には「第 5 波」で 4 回目の緊急事態宣言が出された。緊急事態宣言はこの後出されなかったが、’22 年 1 月には「第 6 波」でまん延防止等重点措置が発令された。（宣言などはいずれも大阪府を対象に含む）

こどもの居場所サポートおおさかでは、この状況下の子ども食堂をはじめ、子どもの居場所づくりにどのような影響が生じたかを明らかにするため、物資提供などで関係をもっていた大阪府内のこども食堂を対象に、ヒアリング調査を２回実施した。

方法：電話によるヒアリング

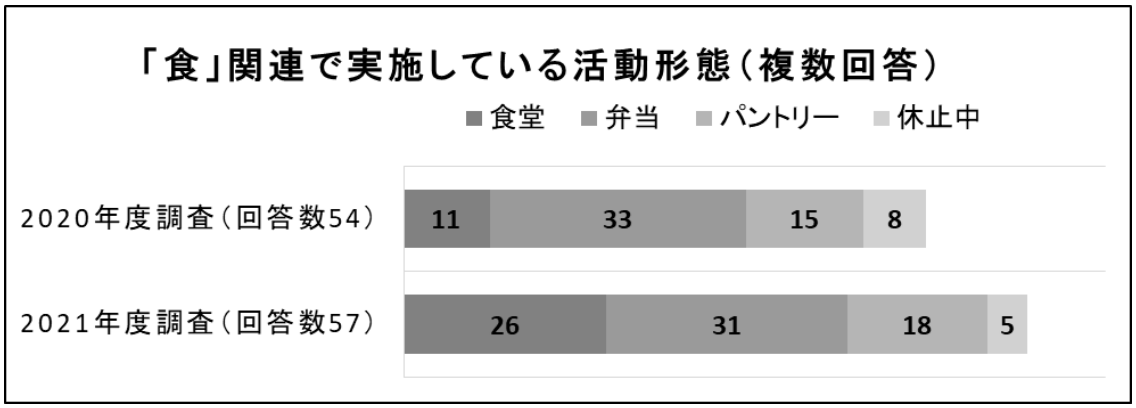
時期：（2020 年度）’21 年 2 月……54 カ所　（2021 年度）’21 年 12 月……57 カ所

対象：こどもの居場所サポートおおさかの登録団体

内容：活動をしている中での困りごとやこどもの変化、支援を受けている機関など

まず、それぞれの団体がどのような活動状況にあるかを質問した。コロナ以前に一般的だった集まって会食する形態（以下、「食堂」と表記）か、弁当を提供する形態（以

下、「弁当」と表記）、米やレトルト食品などの物資・食材を提供する形態（以下、「パントリー」と表記）の 3 カテゴリーを設定し、各形態について実施しているかどうか、どの形態を中心にしているかを集計した。



2020 年度調査では、「食堂」を開いていたのが 11 団体（回答数の 20．4%）に過ぎず、残りは活動休止（8 団体）か、弁当・パントリーだけの実施に追い込まれていた。2021 年度調査では、「食堂」開設が 26 団体（45．6%）まで増えたが、活動休止している団体もまだ 5 団体あった。また、弁当・パントリーに取り組む団体は'20 年度と'21 年度であまり変わらず、食堂は休止したが学習支援など「子どもの居場所づくり」の活動は継続している、という団体もあった。

'20 年度に会食形式の「食堂」を継続開催できた団体が 2 割強にとどまった背景には、活動拠点となる場所の問題が大きかったと考えられる。緊急事態宣言下で公共の施設が使用できなくなる中で、継続できた子ども食堂の多くは、個人宅など独自の活動拠点をもっていた団体が多かった。'21 年度に入ると、緊急事態宣言下でも行動制限は弱まり、第 6 波以降は宣言も出されなくなって、「感染対策を取りながら活動を継続する」という方向に行政も転換した。その結果、会場やボランティアの確保状況をにらみつつ、徐々に会食を伴う食堂を再開する団体も増えてきた。

2021 年度調査では、「食堂」を開く回数は、月 1 回が 11 団体と最も多く、次いで週 1 回が 7 団体だった。月 1 回は「第〇土曜の昼」、週 1 回は「毎週〇曜の夕方」というパターンが多く、週 3 回で「月水金の朝食を提供」という食堂もあった。食数は 20～40 食の団体が全体の半数以上を占めたが、中には 180 食の団体もあった。緊急事態宣言中は弁当配布に切り替える団体が多かった一方で、宣言中も「子どもの居場所は不可欠」として開設を続けた団体もあった。

一方で、ボランティアや調理する場所の確保などの条件が整わず、「食堂」を中断、弁当配布に切り替えた団体も多かった。企業や社会福祉団体、行政が物資などの支援に

乗り出したことも背景にある。2021 年度調査では、弁当配布の回数は、月 1～2 回が 7 割を占めた。業者から提供を受けたり、購入したりするケースは 2 割で、8 割が自炊だった。「食堂」では 2 割強だった 50 食以上の団体が 24 団体、77%を占め、100 食以上も 10 団体（31%）あった。弁当方式にしてから増えたケースが多く、会食形式を再開する際の課題となっている、という声も聞かれた。

　またパントリーについては、弁当配布や会食形式の「食堂」と一緒に実施する団体が多く、パントリー単独は 18 団体中 3 団体のみ。物資が入ったらパントリーを実施する、緊急事態宣言が出るとパントリーに切り替える、といった理由で、不定期開催が多かった。企業などの寄付で集まった食材や物資を袋詰めして、世帯にひとつ渡す、という団体が多かった。200 人近い希望者がいる場合もあり、ＬＩＮＥでの予約制や抽選を取り入れているケースもあった。弁当・パントリーともに、困難を抱えた家庭への支援や、緊急事態宣言下での対策として、持ち帰りでなく配達を実施しているケースもあり、弁当で 10 団体、パントリーで 8 団体あった。

　コロナ禍の中での運営が丸 2 年となり、「当分続くコロナ禍の中でどう運営していくか」という意識が強まっているように感じられた。その中で、志向性として「子どもの居場所づくり」を重視する方向と、「困っている家庭への支援」を重視する方向の両方が見て取れた。「居場所づくり」を志向する中では、感染対策に配慮しながら食事以外の「集まる」機会づくりや、学習支援などに力を入れる試みがあった。一方で経済的困窮、外国籍、ひとり親、しょうがいなど、困難を抱えた家庭（子どもに限らず）への支援に力を入れる団体は、パントリーや弁当などの「配達」に取り組んだり、福祉行政や学校との連携を進めたりするケースがみられた。

　活動場所やボランティア確保、資金などの悩みは、’20 年度・’21 年度も大きい。ただ、個別支援の重要性が高まるにつれて、専門的なスキルをもった人材の育成や、センシティブ情報の管理など、組織運営に伴う悩みが大きくなっている。中間支援としてのサポートセンターには、従来の物資・食材の提供だけでなく、人材や組織、広報などの専門的な支援や、活動団体同士のネットワークづくりが求められている。

2. 2022 年度調査の目的と方法

コロナ禍以降に活動を開始した団体が３分の１

- ２年間のヒアリングで浮かび上がった課題を踏まえ、対象を大幅に増やし、大阪府内 289 団体から有効回答が得られた。
- 属性は法人格を持たない任意団体が 38.0%で最も多く、NPO 法人の 17.4%、町会など地域団体の 11.1%が続く。
- 活動開始年では、コロナ禍が始まった 2020 年以降が計 96 団体で、全体の 33.2%に達した。

2022 年度のコロナウイルスは「オミクロン株」が主となり、夏には再び感染者数がピークとなる「第 7 波」となった。ただ、ワクチン接種が進んだ効果などもあって重症化率は下がり、飲食店などの時短を伴う措置は出されていない。一方で、円安やロシアのウクライナ攻撃の影響で物価が上がり、シングルマザーの家庭など経済的困難を抱える層が直撃を受けている。

こうした中、コロナ禍以前の「会食形式の食堂」を再開し、子どもたちとの交流を広げる動きとともに、コロナ禍の状況をふまえて新たに食堂を開設しようとする動きがみられる。「認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ」が各地のネットワークや自治体を通じて集計した全国のこども食堂の箇所数は、'22 年 12 月速報値で 7331 カ所、コロナ禍以前（2019 年調査）の約 2 倍に達したという。大阪府内でも、コロナ禍になって以降に開設された「子ども食堂」は少なくない。そこで今年度は、「子どもの居場所サポートおおさか」に関わりをもつ団体だけでなく、市町村のホームページなどで活動が確認できる団体を含め、広く府内の団体を対象に、量的調査を実施した。

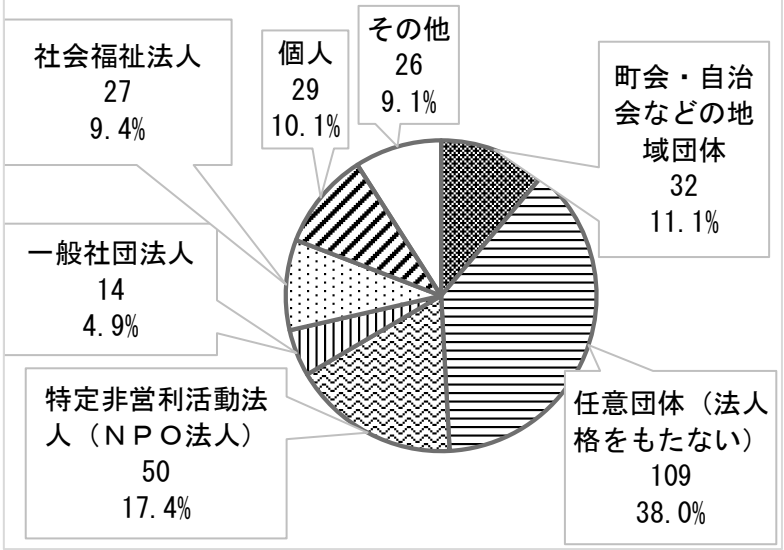
方法：郵送およびメールで調査票を発送し、インターネットの記入フォームと、紙による回答を併用

対象：大阪府内のこども食堂。669 団体に発送、有効回答 289 団体（重複分除く）

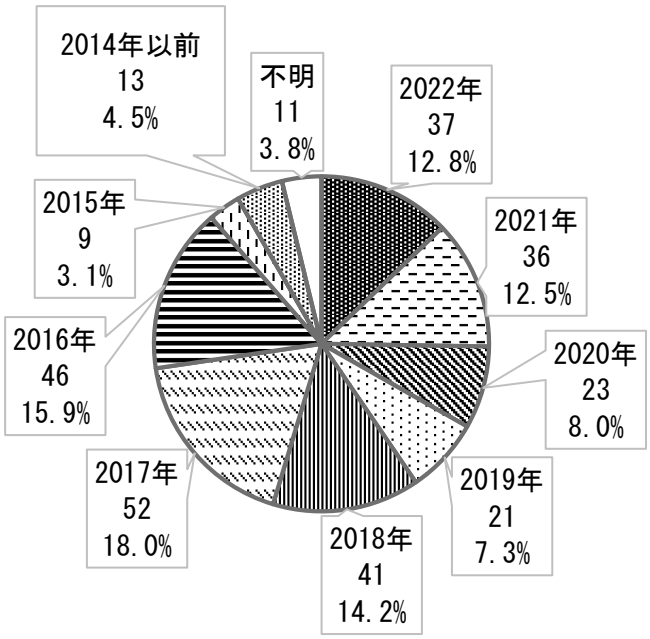
内容：コロナ禍における活動実態、効果、課題、など

289 団体の属性は、法人格を持たない任意団体が 38.0%で最も多く、ＮＰＯ法人の 17.4%、町会・自治会など地域団体の 11.1%が続く。所在地は大阪市が 48.9%を占め、堺市が 14.2%、残りはほぼ府内全域に広がっていた。活動を始めた時期は、2017 年が 18%で最も多く、2016～18 年の 3 年間で半数近くを占めたが、コロナ禍がはじまった 2020 年以降に始めた団体も計 96 団体、全体の 33.2%に達した。

問１　回答団体の属性　(無回答 2　n=287)



問３「こども食堂」の活動を始めた年　(n=289)



問2　団体の活動地域

大阪市	141	48.8%
阿倍野区2、旭区8、港区3、此花区3、住吉区10、住之江区4、城東区4、生野区7、西区2、西成区12、西淀川区7、中央区2、鶴見区8、天王寺区2、都島区4、東住吉区11、東成区6、東淀川区2、福島区4、平野区3、北区1、淀川区9、浪速区3、不明24		
堺市	41	14.2%
堺区10、中区3、西区8、東区6、南区5、北区7、美原区2		
北摂	28	9.7%
箕面市1、池田市5、豊中市8、吹田市7、茨木市4、高槻市1、島本町1、能勢町1		
北河内	25	8.7%
守口市1、枚方市10、寝屋川市3、大東市5、門真市3、四條畷市1、交野市2		
中河内	17	5.9%
東大阪市8、八尾市9		
南河内	8	2.8%
羽曳野市1、松原市1、藤井寺市1、富田林市4、太子町1		
和泉	27	9.3%
岸和田市5、和泉市3、泉大津市4、高石市3、貝塚市4、泉佐野市5、泉南市1、忠岡町1、熊取町1		
不明	2	0.7%

3. 2022 年の全体的な活動状況

会食形式の「食堂」は 61%、「弁当」は 55%

- ‘22 年 10 月時点で会食形式の「食堂」を開設しているのは 176 団体、全体の 60.9%。単純比較はできないが、‘20 年度の２割、‘21 年度の４割と比べ、会食形式の再開・実施は着実に増えている。
- ‘22 年 10 月時点で「弁当持ち帰り」の活動を実施しているのは 55.7%、「フードパントリー持ち帰り」は 42.9%。弁当やフードパントリーの「宅配」をしている団体は、それぞれ 18.3%、17.3%。
- 活動１回あたりの提供食数は、コロナ禍以前と比べ「増えた」が 39.8%、「減った」は 17.3%。弁当・パントリーに取り組む団体では、「増えた」が半数を超えた。

問４　過去・現在問わず、実施したことのある「食堂」関連の活動　(n=289 複数回答)

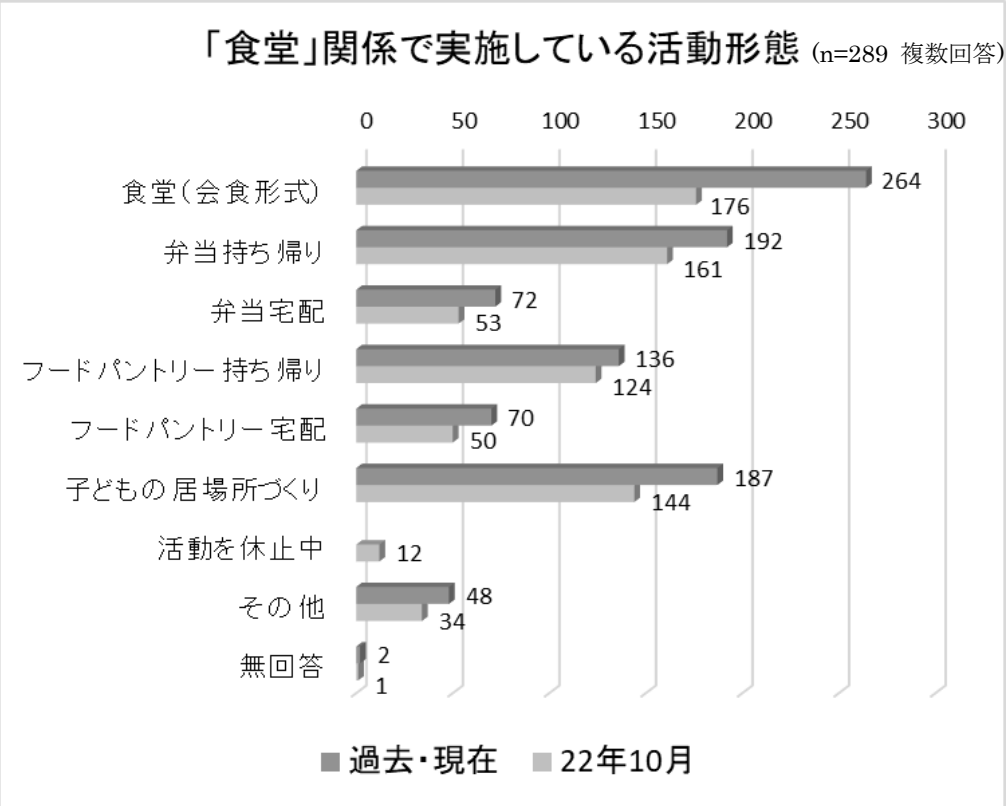
1　食堂（集まって食事をする会食形式）	264	91.3%
2　弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）	192	66.4%
3　弁当宅配（家庭に届ける形式）	72	24.9%
4　フードパントリー持ち帰り　（食材などを取りに来てもらう形式）	136	47.1%
5　フードパントリー宅配　　（食材などを家庭に届ける形式）	70	24.2%
6　子どもの居場所づくり（学習支援など）	187	64.7%
その他	48	16.6%
無回答	2	0.7%

まず、過去・現在問わず実施したことのある活動全てを挙げてもらうと、「食堂」（会食形式）が 91．3%と高い率を占めた。続いて弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）が 66．4%、子どもの居場所づくり（学習支援など）が 64．7%と続き、フードパントリー持ち帰り（食材などを取りに来てもらう形式）も 47．1%と半数近くを占めた。

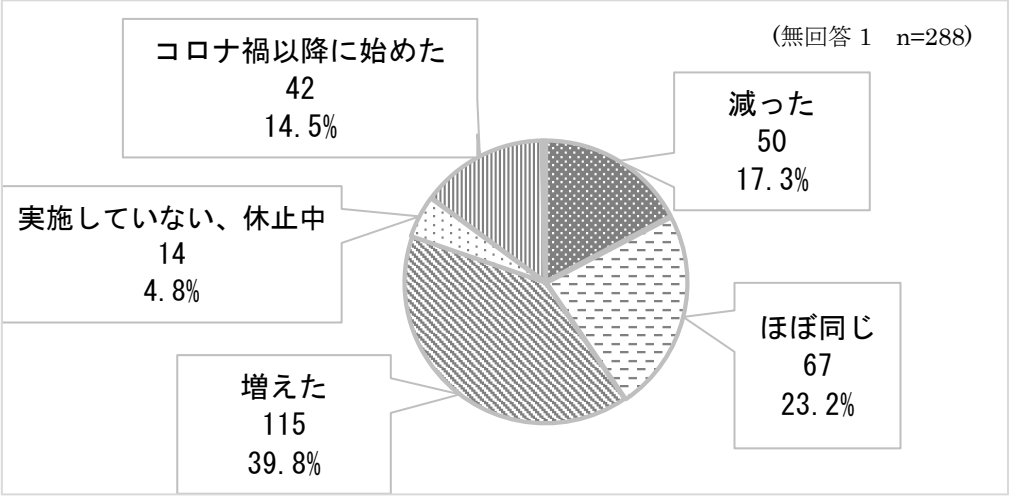
問 5　2022 年 10 月時点で実施している「食堂」関連の活動　(n=289 複数回答)

1　食堂（集まって食事をする会食形式）	176	60.9%
2　弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）	161	55.7%
3　弁当宅配（家庭に届ける形式）	53	18.3%
4　フードパントリー持ち帰り　（食材などを取りに来てもらう形式）	124	42.9%
5　フードパントリー宅配　　（食材などを家庭に届ける形式）	50	17.3%
6　子どもの居場所づくり（学習支援など）	144	49.8%
7　活動を休止中	12	4.2%
その他	34	11.8%
無回答	1	0.3%

これに対し、’22 年 10 月時点で実施している活動では、「食堂」（会食形式）が 60. 9%とトップではあるが、「過去・現在問わず実施したことがある」の 91. 3%と比べると 3 分の 2 程度に減った。一方で弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）は 55. 7%、フードパントリー持ち帰り（食材などを取りに来てもらう形式）も 42. 9%で、これらは「過去・現在」の 8～9 割で、減った率は少なかった。



問６　「こども食堂」などの活動の１回当たりの提供食数のコロナ禍前と比べた変化



（22年10月時点で実施している活動に分けてみた提供食数の変化）　(n=289)

	団体数	減った	ほぼ同じ	増えた
食堂（会食形式）	141	31(22.0%)	46(32.6%)	64(45.4%)
食堂（会食形式）のみ	51	13(25.5%)	19(37.3%)	19(37.3%)
弁当持ち帰り	137	21(15.3%)	34(24.8%)	82(59.9%)
弁当宅配	47	6(12.8%)	7(14.9%)	34(72.3%)
フードパントリー持ち帰り	105	13(12.4%)	21(20.0%)	71(67.6%)
フードパントリー宅配	46	6(13.0%)	5(10.9%)	35(76.1%)

注）この数字は、それぞれの活動を行っている団体ごとに、全体としての提供食数の変化を集計したものです。活動ごとの提供食数の変化ではありません。

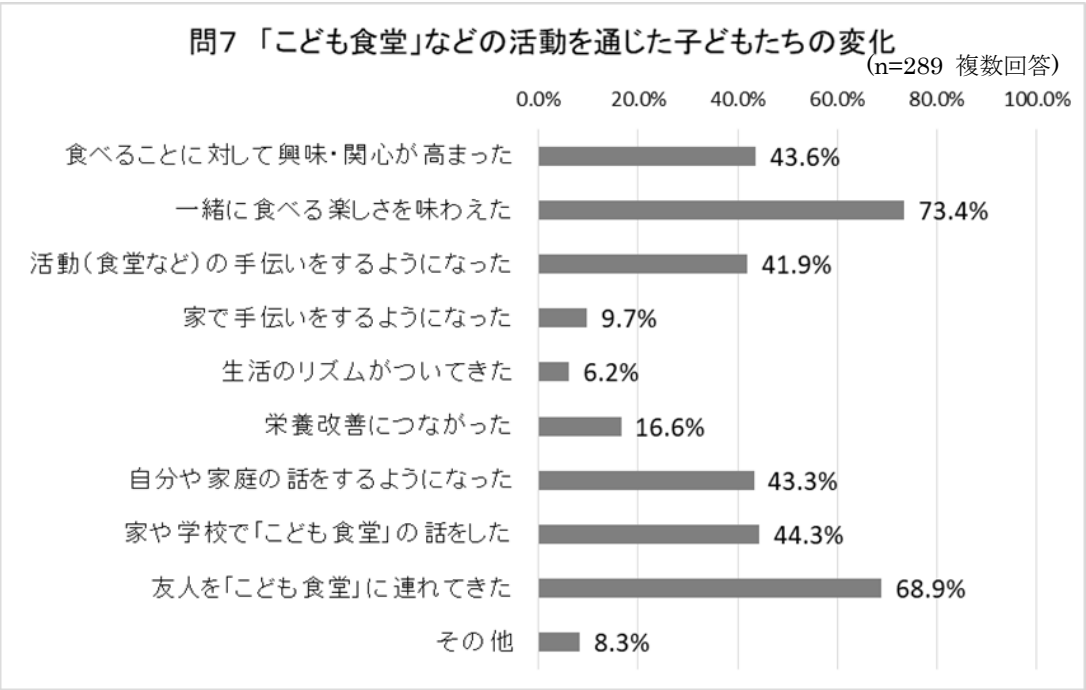
「食堂」をはじめとした活動での提供食数は、コロナ禍以前と比べて全体的に増えている。特に、弁当配布やフードパントリーの活動を行っている団体では、全体の食数がコロナ禍以前より増えている割合が目立って多く、弁当持ち帰りで 59.9%、フードパントリー持ち帰りで 67.6%、それぞれの宅配形式では７割を超えている。そうした活動を行っていない（会食形式のみ）団体では、「提供食数が増えた」割合が 37.3%にとどまっていることを考えると、弁当・パントリーを加えた、または切り替えた結果として、食数が増えた可能性が高い。

自由回答では、食数が増えた結果として会場や調理能力などの問題から会食形式に戻すのが難しくなった、という悩みが複数みられた。

4. 「食堂」などの活動を通じた子どもたちの変化

「交流」の場としての効果がくっきり

- 「食堂」などの活動を通じての子どもたちの変化としては、「一緒に食べる楽しさを味わえた」「友人を『こども食堂』に連れてきた」がともに約７割で、「交流」の場としての効果が顕著。
- 「居場所」づくりやボランティア参加、食育、貧困対策などの効果も確認できた。



問７では、「こども食堂」などの活動を通じて、子どもたちにどんな変化があったかを、複数回答で選んでもらった。子どもたちが「一緒に食べる楽しさを味わえた」が73.4%、「友人を『こども食堂』に連れてきた」も68.9%で、「交流」の場としての効果がはっきりみられた。続いて「家や学校で『こども食堂』の話をした」「食べることに対して興味・関心が高まった」が４割強。他の選択肢に比べると目立たないが、「栄養改善につながった」が16．6%あり、貧困対策や食育といった効果も見逃せない。

《自由回答から》こども食堂　６つの効果

・子どもや保護者によい変化があったと思われるエピソードから、「意欲」「居場所」「交流」「参加」「支援」「食育」の６つのキーワードが抽出できた。

・「意欲」……子ども自身の生活や将来への意欲を引き出し、高める。

・「居場所」……さまざまな課題を抱える子どもの居場所になる。

・「交流」……親子・参加者同士・参加者と地域の関係が深まる。

・「参加」……子どもや保護者がボランティアなどで活動に参加する。

・「支援」……子どもや家庭が必要としている支援のルートをつくる。

・「食育」……子どもの食に関する関心を高め、質を向上させる

問８では、食堂などの活動を通して、子どもや保護者によい変化があったと思われるエピソードについて、より具体的に知るため、自由回答形式でたずねた。回答を分析すると、大きく分けて６つのカテゴリーに分類できた。

１．「意欲」　子ども自身の生活や勉強、将来への意欲の高まり

- お弁当を渡すときに、子どもたちや保護者にも声かけをしていることで、学校での報告や子育ての悩みなども話してくれるようになっている。フードバンクからの提供品やお米等をお土産に 渡しているので大変喜ばれている。
- 不登校児童が学校に毎日登校できるようになった。同じ悩みを持つお母さん、子ども同士が交流できた。常に通う親子が食堂運営を手伝ってくれるようになった。
- 小中と不登校だったこどもが、スタッフの支えで高校へ進学することができた。
- 役所経由で繋がった、不登校の男児が、活動日に早くやってきて、手伝ってくれるようになった。

- 今年春から利用している中３生が、家ではよく料理を作っていないので、お弁当やウーバーイーツで済ませているようです。子ども未来塾の子ども食堂を利用するようになり、家が明るくなった。自分のことも話せるようになった。家族にも定時に登校できるようになったと本人から聞いています。と担当の先生から感想を伺った。
- 高校生の息子さんと会話が全くなくなってしまっていたのに、月に一度の食材の箱を開ける時は、話をしたり食べたことのない物で盛り上がるそうです。最近は、入っているパスタ等で料理を作ってくれることがあるそうです。
- 家庭でウーバーやコンビニの食事しか取れなかった女の子が、月 2 回の手作りカレーを楽しみに来るようになり、不登校気味でしたが 2 学期には毎日 8 時に学校に来るようになったそうです。
- 他の子を見て、勉強したいと言い出した子がいます。お母さんも子どもが高校に進めるように仕事をするようになった。
- 高校への進学意欲が出てきた。
- 子ども達は挨拶ができるようになった。又、ゴミを自ら拾う様子が見られるようになった。
- ママ友ができて息抜きの場になっている。学生でボランティアに来ている子が積極的になってきた。初めはかかわりの少ない男の子が甘えてきてくれるようになった。
- 不登校気味の子供がいた。当初はお弁当を家まで配達していたが、イベントに同級生に誘われたのをきっかけに、お弁当を取りに来るようになり、笑顔を見せるようになった。
- コロナで仕事を失いうつ病までなってたひとり親家庭のお母さんが、社会福祉協議会で子ども食堂を紹介頂き、私達の子ども食堂とつながるようになりました。３カ月ぐらい後にボランティアとしても参加し、そのきっかけで前向きになり、お仕事も見つかって元気になりました。
- 自己肯定感が高まり、いろいろなことに挑戦できるようになった。
- 人見知りが強く、お母さんとでしか楽しめていなかったお子さんが、少しですが、スタッフの声掛けにも反応してくれるようになってきました。
- 挨拶も返事も出来なかった親子さんが、回数を重ねるごとに明るくなり、元気に挨拶をしてくれるようになった。

- 参加してから親離れができるようになり、いろんなことに意欲的になり、積極的に一人でも参加できるようになった。スポーツに興味なく、休みも家にいてゲームばかりでしたが、体験会に参加してから、今もそのスポーツを続けている。

- 活動を通して子どもたちが集い参加する事で、他人に対しての思いやりがうまれ、自尊感情の向上が見られる。長期休校中の昼食支援では、子どもたちから「私たち手伝いたい」との声がよせられ、子どもたちとスタッフ会議を行い、運営を子どもたちだけでやれるとのことで、大人はその後方支援を行うこととなった。2022 年 9 月に、子どもが居る世帯に向けたアンケート調査では、参加してみたい・内容により参加を検討するとの回答が 50%を超える結果であった。また、フードパントリーに来られる保護者から「なんでもお手伝いしますよ」との声がよく聞かれる。

- 子どもの友人、姉妹などのつながりで最初来てくれることが多いが、時々一人でくる子どもは一人で食事をしていた子どもが、次に来た時には友人ができて活発になっている姿をよく見かける。母親も子ども食堂へ行くことに安心して参加させている。

- 普段家族で使ったことのない野菜を食堂で提供することにより「家庭でも使ってみました」とお声を頂いたり「食器を片付けるようになりました」と言っていただくことがありました。

- 子どもが生き生きしてきた。保護者には子どもが宿題を済ませて帰宅するので、とても助かっていると喜んでいる

２．「居場所」　さまざまな子どもや親が安心できる場

- 市の子ども福祉課と連携することで、不登校の家庭とつながり、子ども食堂に来られるようになった

- 親子での参加が多く、子どもの居場所はもちろん親同士の交流やボランティアさんの居場所にもなっていると感じている。子どもを真ん中に大人がつながることで、大人も子どもも元気になれる。特にコロナ禍で人と会えなかった時、お弁当を取りに来て一言二言かわすだけで元気になれた。

- お母さんの余裕が生まれて親子で笑顔が見られるようになった

- ひとり親家庭で、朝から夜まで日曜日も家で 1 人だった子が、孤食ではなくみんなで食べることの楽しさを味わってくれて、本人も親もとても喜んでいます。

- 生活に疲れ気味のシングルマザーが、居場所があって、話を聞いてくれる人がいて、前向きに人生を考えることができると喜んでくれたこと。
- 複雑な過程で育った父親が、自分のしんどさや生い立ちを人に話ができるようになってきた。相談してもいいんだということがわかってきて、他者と話できるようになった。子どもたち（ヤングケアラー、中高生）が居場所になり、学校や親のことを話すようになった。
- 親が自分のしんどさを話せるようになってきた。
- 現在の子どもの居場所ではないが、校区は同じで中学３年生になった子どもが訪ねてきたのでそのまま手伝いに入ってもらった。不登校気味の子どもだが、自分の居場所が見つけられたらうれしい。受験だが、「お手伝いできるときは来てね」と言ってある。たわいない話でも子どもの心がほぐれるのが良かった。
- 不登校の子どもが食堂には来るようになった。
- 普段忙しくて一緒にご飯を食べられないママが「こんなに楽しそうに笑って子どもと過ごせるなんて。こんな顔見たことが無かった」と喜んだ。母子家庭の４人の子どものうち一番上の中学生（不登校気味）について「楽しい場所がこの子にできてよかった」。
- 家に引きこんでいた方も私たちにとけ込んでお話をされる様になりました。
- 学校では先生に問題児扱いされている子供の居場所になる
- 地域で自分達を応援してくれる人がいる事や、直接勉強をみてくれる人がいるということで、子ども達は存在してもいいんだと思ってくれてました。社協さんの取り組み支援ですが、いろんな場面でいろんな顔が見えて、すごく貢献出来ていると言ってもらえてます。

３．「交流」　親と子・参加者同士の交流や地域での関係づくり

- 来場者の保護者同士での出会いや交流が何例か確認できました。また、当法人では主事業でフリースクールを運営しておりますが、フリースクールの生徒達がすすんでお手伝いをしたいと申し出てくれたり、自主的に行動できたり、幼児をあやすのが上手だったりと、素晴らしい点を毎日見ることができております。
- 参加した母親同士が子育ての話をした。仲間づくりの一助になった。

- 自分の子ども以外の子どもたちにも声かけや話しかけをしてくれています。よその子には優しく出来ると話されています
- 子どもが、誰かと食事することを楽しんでいる。子ども達が、信頼できる仲間と出会ったこと。
- スタッフ、地域の方を覚えて、町で会っても挨拶、話しをしてくれるようになった。
- 子どものお友達の親御さんと話し、ＬＩＮＥ交換もでき安心しました、と何人もの保護者に言われました。子どもたちからは次いつ、と毎日の様に聞かれます。また次は違うお友だちも連れて行くなどと声をかけられます。
- 特に参加してくれた保護者の方が地域の知らない子供にも声を掛けてくれるようになった（挨拶など）子供も、自分から進んで挨拶するようになった。
- 保護者も忙しい中、月 1 回の子ども食堂の日は買い物も皿洗いもしなくて良くて、その分時間があり夕食をゆっくりと楽しめ、コミュニケーションがとれるので嬉しいとの声がありました。
- コロナ禍前の食堂形式では、年齢の違う子ども達が一緒に遊んだりして、同年代だけでない繋がりや、小さい子と遊ぶ中での労り等を学んでもらえたのではないかと思っています。
- 親子連れで参加しても子どもたちだけで食卓を囲むようになった。ママたちは大喜びやらこぼしたりしないか心配するも、全部子どもたちが協力して和気あいあいで食事してる。
- 孤食の子どもが一緒に食べる楽しさを感じている。
- 校区など区切ってやっていないので違う学校の友達が出来たりした子ども達がいます。
- 高齢者施設内で開催しており、コロナ禍前は施設内で配膳のお手伝い等、多世代と交流する機会を設けて普段できない経験をする事ができた
- 祖父と孫の二人暮らしの方が、子供食堂参加により、一緒に過ごす時間が少しでも取れるようになっていた。
- 食堂開催時は保護者にも食事を提供しゆっくり過ごしてもらい喜ばれた。子ども達も食後、手づくりのあそびコーナー を設け異年齢間で遊べた。

- 開催初期は、孤食になりがちな一人っ子や共働き家庭の子どもを対象に週１回ボランティアスタッフや友達との交流ができるようにと始まった。実際活動してみると、参加者はそういった子どものみではなく、学校や学年・世代を超えて友達と一緒に過ごせる時間となっている。
- 上級生の子どもが小さな子の面倒をみながら食事をする様になったり、笑うようになった。
- 子どもだけでなく若いお母さんや高齢者の集まれる場所になり高齢者と一緒に遊んだりしています。
- 毎月楽しみにしています！と言ってくれるご家庭が増えてきました。私に会いたいから来たよと言ってくれる人もいたり、地域での交流が少し広がってきたと感じました。
- 地域でコミュニティができるようになり、繋がりが広がっています。シングルマザーからも悩み相談を受け、解決する方法を一緒に見つけることができています。
- 地域で集まることにより、子どもや保護者の輪が広がり交流が増えた。
- 実施形態を子どもから高齢者まで誰でも参加できる形にしたので色々な世代の人が参加しています。大学生のボランティアがＳＮＳを使って情報発信をすることにより若い母親層の参加が増えました。
- 子ども達が幅広い年齢層、外国籍の子ども達と触れ合うことで良い経験になった。
- 近隣とのつきあいが希薄な地域で「子ども食堂」をはじめましたが、年代が異なる人達との関係が構築できるようになりました。認知症カフェを開催していた頃に乳児だった子どもさんがあいさつをしてくれるくらい成長されて、近くのスーパーでも声をかけてくれるようになった。
- 異年齢や若者同士が補い合う関係。若者が同じく若いシングルの家庭の子どもと関わり、互いの休息になったり近い年頃での関係がとても良い。
- 子ども食堂を手伝うのは地域の高齢者が中心であり、核家族が多い子どもたちにとっては、世代間交流の良い機会である。また、地域の子どもたちを大人が知ることで、昼間に起こりえる防災にも貢献できると考えている。
- 世代間交流が行われている食堂なので、シングルマザーの方は世代の上の人と話すことで安心感を得られる。

- コロナ前の会食形式では、子ども間だけでなく、若い母親たちの交流の場になっていた（子育ての悩み、市内の子育て支援情報など）。フィリピンから来た家族が、子ども４人と毎月一回きていた。地域のスタッフと交流できて楽しい時間を過ごしていた。
- こども食堂に手伝いに来ているボランティアに対して、子どもらが道であった時に「卵焼きのオバちゃんや！！」と声をかけていた。このような地域の人と子どもたちとがつながることもあるのだなと嬉しく思った。
- 地域の方々の話題の１つとなり、そこで久しぶりに出会ってお母さん同士会話を楽しまれていたり、ひとり親家庭の情報を提供してくださったり、子どもさんなどのサポートをするきっかけがうまれた。
- 地域での活動なので、会館が高齢者だけのものでなく地域の人が利用できる場であると知ってもらえた。コロナ禍で毎日誰でもよれるように玄関の扉を開けているので、色々な世代の人が立ち寄ってくれている。
- 子ども食堂の日でなくとも子どもが毎日のように集まり遊ぶ様になったことで子どもの居場所となれたと思う。コロナによって大人同士の交流もなくなり、食堂の手伝いしてくれる保護者同士や来た保護者同士の交流の場となれて、交流の場の必要性を感じた。
- 子ども食堂で地域外の子どもと友達になる。保護者の情報交換の場となる。飲食のみではなくボードゲームやボール遊びをして子どもと接する時間が増えた。
- 未就学の子どもと母親が参加して、子どもが遊んでいる間、母親同士が会話できた。両親と子どもで参加し、父親と子どもが遊ぶ姿があった。ボランティアの方が参加を楽しみにしてくださり交流できた。
- スタッフの平均年齢が高く、保護者の声をひろえば、「祖父母は近くにいないので子どもと接してくれる年配の方との関係がうれしい」とのこと。ほとんどが保育園の卒園児で、卒園児でない友達も誘ってきてくれて利用者の幅が広がっている。
- 地域で子どもたちと出会うと子どもたちから声をかけてくれる。「次の食堂のメニューは何？」とか「今度も行くからね」等声をかけてくれる。笑顔を見せてくれるととても嬉しい気持ちになる。
- 「校区を超えて友達ができた」と喜ぶ子どもの声。家庭では孤食になることが多いので、大勢で食べるのを親子で楽しんでいる様子あり。

- 地域の独居の高齢者などとの繋がりが出来た。
- 通学時に「カレーのおっちゃんや」とか、子どもが今まで近づいて話してくれる。地域のお年寄りとも顔を合わすたびに親しく話す。
- ひとり親家庭で日々仕事と子育てに追われていたのですが、月一回の子ども食堂の日だけは夕飯の準備に追われないので、保護者の方は気持ちに余裕ができ、子どもとゆっくり食事をしながら話ができた。
- 子どもだけでなく、高齢者などみんな来てもらっているので、年代をこえて交流している。そんな中、子どもたちがお年寄りのお世話をしているのを見ると、ほほえましく思う。
- 校区を超えた友達ができた。子ども食堂について親子で会話するようになった。不登校の子どもが食堂には来るようになった。
- 登校時、大きな声であいさつをしてくれたり「いってきます」「ただいま」などの声をかけてくれるようになった。見守り隊、地域の人との交流が深まり、信頼関係が深まった。

４．「参加」　食堂活動への子どもや保護者の参加・ボランティア

- 不登校気味の子どもが学校に行けるようになった。不登校中の子どもがうちの子ども食堂の活動（ワークショップやゴミ拾いとその前後の会食）には来て友だちと仲良く過ごせた。生保家庭のお母さんがお弁当作りのボランティアに参加してくれた。
- 参加者のお母さんもお手伝いしてくれるようになった。子ども同士が学年を問わず遊べるようになった。
- 暮らしぶりが大変な世帯への食材配達を続けているが、訪問先の子どもたちが子ども食堂の手伝いに自主的に参加してくれていて、活動に参加する中で自信を深めてくれている様子を見て本人も親御さんも喜んでくれている様子を見て、活動継続してきた意義を感じました。
- 行政の要請により会食が禁止されてる状況が続き、なんとか交流の機会が作れないかと「調理」に参加を呼びかけ、調理を通じて交流が深まった。
- 食堂に参加する子供が高校に進学し学習支援の学生ボランティアとして参加するようになった。

- 不登校の子どもが、子ども食堂のボランティアをしてくれている。
- 利用されてる家庭の方で最近多いのが吹田市のフードドライブに寄付してくれたり、うちに食材を持ってきてくれる家庭が増えました。
- 家では手伝ってくれないけど、こども食堂に来たら食べた後の食器を運んだりしてくれるので嬉しいですという声を聞いたことがあります。
- 子育て中の保護者も受け入れているため、一週間に一回は子どもとゆっくり食べられる親子の時間として参加しているという声もあった。結果、乳幼児のお世話を楽しむ小学生の様子もみられるようになった。また、不登校児の居場所にもなっている。
- 参加してくださった方の中で、次回はスタッフとして手伝いたいとおっしゃる方が増えてまいりました。
- うちの子ども食堂に参加した事がきっかけで高校生になってからは学習支援ボランティアをしてくれるようになった。
- 10 年もしていると地域の子どもが学習支援の先生になってくれるなどコミュニティが繋がっている
- 活動を始めた当時、小学生だった子供が中学生や高校生になり、活動を手伝ってくれるようになった事
- 手伝いをするようなってから役割を感じるように可能な範囲ではあるがお願いした作業はきちんと終わらせる事ができるようになった。また、学年の違う子達との会話を楽しめることや自主的にどの活動に参加するか理由を持って選べるようになってきた。
- こども食堂を利用していた保護者さんにボランティアスタッフとして活動に参加していただいた。
- 親子でボランティア参加を申し出てくれることが増えた。
- 居場所のない卒業生や、教室に入りづらい生徒が手伝いにきてくれるようになった。
- 保護者から食材の提供があった。
- 調理などスタッフとして参加。子どもの呟きから見守り充実。子どもの調理活動の主体的参加。

- 子ども食堂に中学生からきていた子が高校生になりボランティアとして参加してくれるようになり、弁当の配膳や遊びの手伝いをしてくれるようになった
- 最初来だした頃は　そっけない態度が多かったこどもさんが、言葉をかわす機会が増えていくと色々家族の話しや悩みなど話してくれるようになり、今ではお手伝いしてくれたりするようになってきた。保護者さんがフードパントリーから子育ての相談が増えてきて、親子ともに関わることが増えた。
- 子ども食堂に続けてきている子どもが、率先して周囲に気遣い、新しい子どもに対して世話や場をまとめるように行動してくれるようになった。

５．「支援」　食堂をきっかけにした保護者の相談、家庭の支援

- 小学校の欠席日数が多い子どもが、個別支援として食料食材を届けることにより登校日数が増えてきました。（学校からの報告）しんどいお母さんがＳＯＳを直接出せるようになった。
- 小学校の先生方が、保護者と連絡が取れるようになった。
- 子育て相談ができることがわかり、小さなことでも相談をしにくることで、問題が早く解決できるようになった。学校との情報連携が密になった。
- 子育てについての不安や心配事を話せる場所になっている
- スタッフにあうのを楽しみにしてくれている子どもがいる。保護者からは、家よりも子どもを怒ることが減った、という話があった。
- 子ども食堂から、コロナ禍はおべんとうの宅配をすることで、家庭の現状が見え、困りごとを聞き取り、一緒に改善をしていくとともに必要な機関につなげることができた。
- 普段お話する機会のない子どもが自分の心境を話してくれてそれについて後日、保護者との繋がりがもてた。
- 貧困の困りごとを行政以外で相談できる窓口として活動出来ております。これも居場所サポートおおさかのフォローがあっての活動です。（渡す物がないとどうにも出来ませんので）
- 乳幼児とお母さんとが一緒に来て、楽しく過ごしていた。お母さんが子供を安心して「こども食堂」に行かせる事で、自分の自由時間がとれる。

- 両親が離婚し、父親と離れてしまった男の子が、当こども食堂の行事に父親と一緒に参加したことをきっかけに繋がり、以来、良好な親子関係を続けてくれている。
- 外国にルーツのある子どもの親と、コミュニケーションをとれるようになり、日常生活の困りごとを話してくれるようになった。
- 生活困窮のおり、「お米を分けて欲しい」など、助けを求めてくれるお母さんがいました。困った時に頼ってみようと思っていただきうれしかったです。
- 活動を通して子どもの養育環境や状況を把握する事が出来て以降の支援につながった。
- 食材やお弁当、食事の提供により、親の生活負担（炊事など）が軽減され、その分こどもに向き合えるようになった
- 保護者は、子どもより先に出勤するのが不安だったが、毎日朝ごはんの提供でそれがなくなり精神的に楽になった。子どもは、朝いつも菓子パンだったが、ご飯を食べるようになって嬉しい。
- 勉学に厳しかったご家庭が寛容になった。自閉症で他者と行動ができなかった子がイベントに参加し楽しめた。発達障害のある子の保護者が、行政の仕組み申請等を知りより良いサービスを受けられるようになった。
- 弁当配布時に悩みなど相談されることもあり、お母さんの心に少しゆとりができたように思う。また、勉強会や夏祭りによって地域の子どもたちが楽しく学習できた。
- 会食で親子が来た時「子どもに発達障がいがあり、土曜日は朝から子どもの世話で大変だったが、昼食を考えたりしなくてすむと思うとほっとします」と言われた。
- 普段、あまり外食をできない子どもが楽しく食事ができる。保護者も時間がとれた。
- 貧困家庭だけでなく共働き家庭が子ども食堂の日は慌てて食事を作らなくて良いので心に余裕ができ、子どもの話を聞いてあげることができると喜びの声があった。主婦にも休みができる。
- 子ども食堂でつながることで、悩み相談されることが増えた。家計が苦しくなった時に、食材支援を求めてくれることがあった。
- 子ども食堂（会食、弁当）のある日は、母親がホッとできるとのこと。共働きの家が多いので、喜ばれている。たまには母親がホッとして笑顔になると子どもも幸せになる。

- 月一回の割合で自分の時間がゆっくり過ごせるので他の日にも余裕が出来たと嬉しそうに言ってくれた。
- 親子で参加し、その中で子育ての悩みを聞いたり、アドバイスをしていくうちに子どもが落ち着いてきて、親子関係も良くなり成長していく姿もみられることもあった。
- いつも親に怒鳴られると恐れていたが、親に話すとしつけの仕方や育て方がわからず怒鳴っていたのが改まった。
- 子どもが親を子ども食堂につれてきた（紹介のため）。子どもを通して引っ越しの情報を知り、車を出したり運搬したりの手伝いができた。
- 地域で気になる家庭が参加してくれるようになったが、だんだんと保護者の表情が和らぎ、子育てにも緊張感が減り、少し余裕が感じられるようになった。
- シングルマザーの方から、いつもは夕食を作ることに時間を取られて子どもとゆっくり遊んだり本を読んだりする時間が取れないから、子ども食堂のお弁当で家事の負担が減り助かったと言われた。
- 家庭での様子を話の関係ができたことで、食以外の支援につなぐことができた。
- 経済的な理由から通塾を諦めていた児童を学習塾につなげ、模試なども実施し、希望する大学に進学することができた。

６．「食育」　偏食改善など、子どもの食の向上や関心の高まり

- 食べなかった野菜も子ども食堂で提供されたら食べた、保護者がボランティアに料理の作り方を聞いてきてくれた
- 偏食気味の子供が、少しずつ色んな食材を口にできるようになってきた！
- 今のお母さんは手間暇をかけないので煮たきものや魚料理の時は喜ばれている
- トマト嫌いの子どもが帰宅して親に、トマトを食べられたと報告。後日親御さんから感謝の言葉を頂きました。また、子どもの食事のみ提供であっても、その日は大人メニューにして楽しめるのがありがたいと言われました。
- 食べた食器の後始末をさせる様にしたら、家でも自分の食器は片付ける様になったと、親御さんから喜びの声を頂いた。

- 食べず嫌いだった野菜を食べるようになった。
- 野菜を食べる（お代わりする）様になった子どもが何人もいて，親御さんが驚いている。
- レシピ（たまにＬＩＮＥで発信）を家でこどもに作りましたと反応がありました。栄養バランスがいい、朝開催なので助かっている、との声を頂きます。
- 野菜嫌いの子どもが５年の間にしっかり残さず食べられるようになった。子どもの友達作り、保護者の仲間作りにも役立っていると言われる。子ども達のマナーもすごく良くなってスタッフも一緒に楽しい時間を過ごさせてもらい充実しています。
- 偏食が減り、野菜が食べられるようになった。
- こども食堂で栄養バランスの良いものを食べていると、家では偏食のあった子も段々となくなっていった。野菜を食べられるようになったという話はきく。
- 今までカボチャの煮物など好きではなかった子どもが食べた後でポストにとてもおいしかった。ありがとうと似顔絵付きでお手紙を入れてくれた。また、食事を終えて帰る時、美味しかったですと声をかけてくれる。食事のレシピが知りたいとお母さんが言ってくれた。
- 野菜が苦手な子どもも、友達にはげまされてがんばって食べられるようになった。
- 家庭で食べることがない野菜をこども食堂で初めて食べる経験をした。苦手なものも回数を重ねることで食べられるようになった。
- 子どもさんが嫌いな食べ物が弁当に入っていてもおばちゃん達が一生懸命作ってくれたから頑張ってたべるわ、と言ってくれたそうです。
- 朝食の提供をしているが、食後、歯医者が毎回来て歯磨きの指導をしてくれる。虫歯が減ったとのこと
- 働く母親の負担が一食でも減って喜んでもらえている。家庭では作らないものもあり、食べなれていないものでも食べられたと言われた。
- 忙しい母親にとって、食事のサポートがあると楽になる。家であまり食べなくても、食堂に来たらたくさん食べる子どももいた。

5. コロナ禍の中での「食堂」活動継続の工夫と悩み

会食形式の継続・開催には「人」が必要

- 会食形式の「食堂」活動を「基本的に継続」が 36.7%、「断続的に開催」が 32.2%、「休止」が 24.2%
- 継続・再開にあたっての悩みでは、「予定を立てる困難さ」が 43.9%、「運営のためのボランティア不足」が 22.5%
- 継続・再開に必要なことは「スタッフ・ボランティアの協力」が 63.3%、「助成金などの資金支援」が 56.4%

問9 2020年以降の「コロナ禍」の中で食堂（会食形式）をどのように行ってきたか (n=289)

開催方法を工夫しながら、基本的に継続している	106	36.7%
感染状況や緊急事態措置や自粛要請などの様子を見て、一時休止をしながら断続的に開催している	93	32.2%
コロナ禍で、集まって食事をする活動は休止となっている	70	24.2%
もともと、集まって食事をする活動は行っていない	11	3.8%
無回答	9	3.1%

問10 会食形式の「食堂」継続・再開にあたっての悩み (n=289 複数回答)

会食のための場所が使えなくなるなど、活動場所の問題	48	16.6%
コロナ対策のための費用など、運営資金の不足	45	15.6%
自治体などからの自粛・中止の要請	42	14.5%
地域住民の理解を得ることの困難	31	10.7%
運営のためのボランティア不足	65	22.5%
子どもたちに実施日などを知らせるための広報手段の不足	51	17.6%
物資の寄贈が減ったことなどによる、食材などの不足	8	2.8%
コロナの感染状況が日々変わり、予定を立てる困難さ	127	43.9%
法人・団体などの本来の事業を優先する必要	25	8.7%
その他	42	14.5%
無回答	39	13.5%

問11 会食形式の「食堂」を継続・再開するために必要だと思う点　(n=289　複数回答)

子どもたちからの要望	126	43.6%
保護者や地域住民からの要望	101	34.9%
スタッフ・ボランティアの協力	183	63.3%
運営者が積極的に働きかけること	93	32.2%
実施に関しての自治体の協力や理解	109	37.7%
実施に関しての学校の協力や理解	114	39.4%
食材の寄贈などの物的支援	128	44.3%
助成金や寄付などの資金支援	163	56.4%
交流会や研修などによる再開のための工夫などの情報	45	15.6%
その他	23	8.0%
無回答	16	5.5%

「コロナ禍」の３年間での会食形式の「食堂」の実施について尋ねた。問５では'22 年 10 月時点について尋ね、60.9%が会食形式で実施しているとの結果を得たが、この設問では「基本的に継続」が 36.7%、「断続的に開催」が 32.2%で、計 68.9%がコロナ禍においても会食形式を実施した、と回答があった。その１割強が'22 年 10 月時点で休止していることになるが、過去２年間のヒアリング結果と比べても、多くの団体が会食形式の継続・再開に踏み切っていることがわかる。

「会食形式の継続・再開にあたっての悩み」では、「コロナの感染状況が日々変わり、予定を立てる困難さ」が 43.9%で最も多く、「子どもたちに実施日などを知らせるための広報手段の不足」が 17.6%あったことと合わせて、緊急事態宣言をはじめとした行政の対応に左右されて、安定した運営やその周知に支障が出ていたことがうかがえる。また、「運営のためのボランティア不足」が 22.5%あり、「食堂」の担い手がコロナ禍によって影響を受けていることがわかる。自由記述では「大学側の活動中止指示で大学生ボランティア参加できず」「責任問題のためボランティアの要請が困難」といった回答もあった。

「継続・再開するために必要な点」では、「スタッフ・ボランティアの協力」が 63.3%で最も多く、「助成金や寄付などの資金支援」が 56.4%、「食材の寄贈などの物的支援」が 44.3%で続いた。上で述べたボランティアの確保とともに、資金や物資面での支援が安定的な運営に欠かせないことがわかる。

6. 弁当配布・パントリー活動のプラスとマイナス面

「つながり」は増えるが、直接接する機会が減少

・プラス面は、子どもや保護者との「つながり」の維持・開拓

・マイナス面は、子どもと直接接する機会の減少や、子ども同士・子どもと大人との交流機会の減少が多かった。

問12　弁当やパントリーの活動のプラス面　（n=289　複数回答）

以前から利用していた子どもたちとの接点が維持できる	142	49.1%
新たな子どもや家庭とつながることができる	173	59.9%
コロナ感染を心配する保護者や子どもたちも利用できる	174	60.2%
活動について地元住民の理解が広がる	87	30.1%
物資の寄贈や助成金など、活動への協力者が広がる	102	35.3%
活動について学校の理解が広がる	54	18.7%
活動について行政の理解が広がる	68	23.5%
「こども食堂」の存在を子どもや家庭が知るきっかけになる	152	52.6%
スタッフ、ボランティアが少数でも運営できる	93	32.2%
その他	15	5.2%
無回答	33	11.4%

問13　弁当やパントリーの活動のマイナス面　（n=289　複数回答）

子どもたちと直接接する機会が減る	142	49.1%
子どもたち同士、子どもと大人が交流する機会が減る	158	54.7%
弁当の材料やパントリー物資が不足する	38	13.1%
スタッフやボランティアが不足する	37	12.8%
食中毒など衛生面の心配	116	40.1%
課題をかかえる子どもへの対応の難しさ	117	40.5%
課題をかかえる家庭への対応の難しさ	111	38.4%
活動を子どもたちに知らせる広報手段の不足	38	13.1%
集まって食事をする会食形式に戻すことの難しさ	102	35.3%
その他	16	5.5%
無回答	38	13.1%

《弁当・パントリーの活動のプラス面》

選択肢からあてはまるものをすべて選んでもらう形式では、「コロナ感染を心配する保護者や子どもたちも利用できる」「新たな子どもや家庭とつながることができる」を挙げる回答が、ともに約６割を占めた。「『こども食堂』の存在を子どもや家庭が知るきっかけになる」も５割を超え、「つながり」を開拓しつつ、会食形式も含めた「食堂」の活動を展開していきたい、という志向性が感じられた。

自由回答では、「活動年数が少ない我々は思いを発信できる良い機会とも捉えている」「活動の実施が、どうしても外になるので、道行く人への広報にはなる」といった全般的な回答のほか、「発達障がい等で利用しにくい家庭を支援することが出来る」「家から出にくい子ども、外部と関わりたくない家庭との接点ができた」など、個別支援に向けた弁当などの利点の指摘もあった。また、コロナ感染の家庭に食材を届けた経験を報告してくれた団体も複数あった。

《弁当・パントリーの活動のマイナス面》

選択肢からは、「子どもたち同士、子どもと大人が交流する機会が減る」「子どもたちと直接接する機会が減る」がともに約５割で、会食形式に比べて、会話などの形で直接接したり、交流したりという関係が難しい、という認識が広く見られた。一方で「弁当の材料やパントリー物資が不足する」は 13.1%と比較的少なく、弁当・パントリーには企業などの寄付も集まりつつある状況を反映しているようだ。

自由回答では、「子ども食堂の本来の趣旨である居場所の提供の本意を誤解させてしまう。フードバンクと勘違いさせることを懸念しています」「安価なお弁当が手に入るという違った受取方をされる恐れがある事への懸念」「単に『安価な弁当屋』として利用されること」など、直接の接触・交流機会が減る結果として、食堂活動の趣旨や目的が変質してしまうことへの危惧が複数みられた。

7. 「食堂」のネットワークや「食堂」同士のつながり

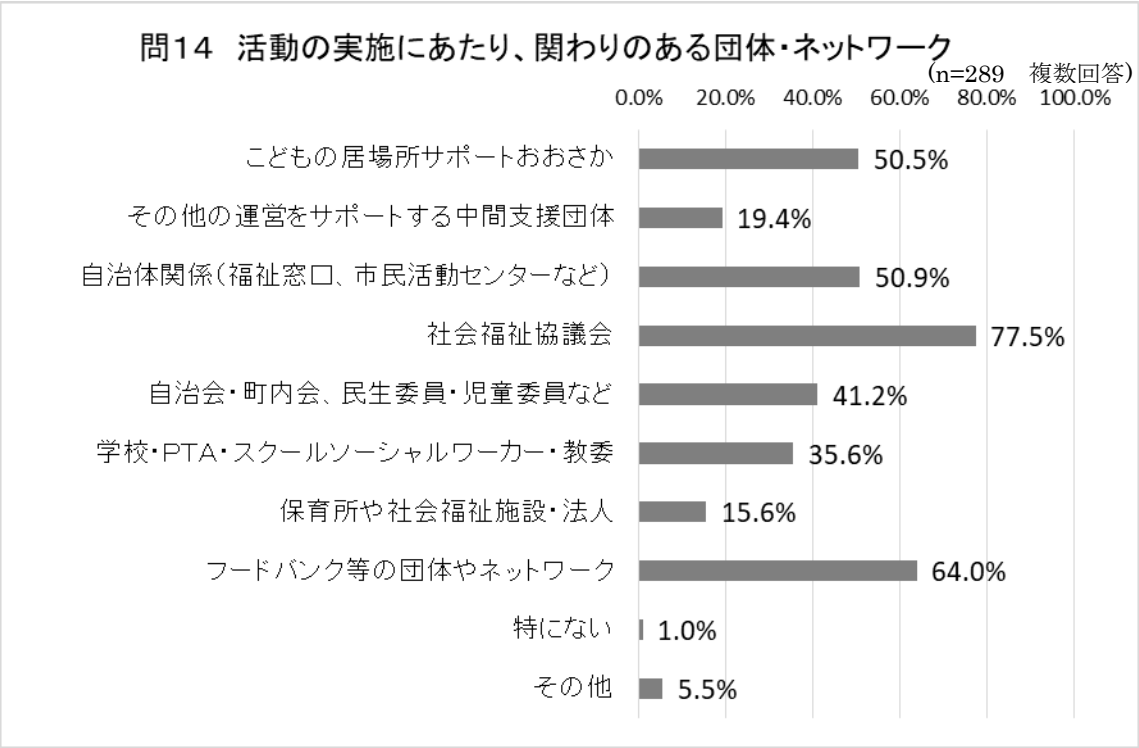
団体によりネットワークに差、必要な支援は「資金」６割

- 関係を持つ団体・ネットワークでは、社会福祉協議会が 77.5%。フードバンクなど、食材・食品の寄付を仲介する団体も 64.0%。
- 「子ども食堂」相互で相談したり、連絡を取り合ったりできる団体の数は、平均３カ所強。「１０カ所以上」が 9.7%ある反面、「なし」が 20.1%で、ばらつきが大きい。
- 解決が必要な課題としては、「資金に関すること」が 60.6%。ボランティア募集、地域資源とのつながりなども４割を超えた。

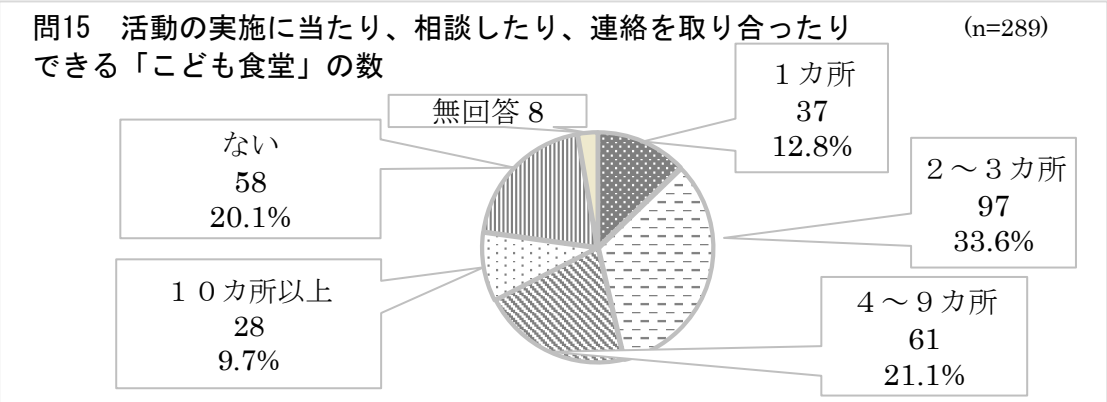
問14　活動の実施にあたり、登録したり、関わりのある団体やネットワークなどはありますか。次の中であてはまるものすべてに○をつけてください。

（n=289　複数回答）

こどもの居場所サポートおおさか	146	50.5%
団体の設立や運営、活動をサポートする中間支援団体（サポートおおさか以外）	56	19.4%
自治体関係（福祉などの窓口、市民活動センター、ボランティアセンターなど）	147	50.9%
社会福祉協議会	224	77.5%
自治会・町内会、民生委員・児童委員などの地縁組織	119	41.2%
学校・PTA・スクールソーシャルワーカー・教育委員会	103	35.6%
保育所や社会福祉施設・法人	45	15.6%
フードバンク等、食材・食品の寄付を仲介する団体やネットワーク	185	64.0%
特にない	3	1.0%
その他	16	5.5%
無回答	7	2.4%



「活動の実施にあたり、登録したり、関わりのある団体やネットワーク」は、社会福祉協議会が 77.5%に達した。「こどもの居場所サポートおおさか」は 50.5%で、まだ関係をもてていない団体が半数あることもわかった。「フードバンクなど、食材・食品の寄付を仲介する団体」は 64.0%で、問 16 にみるように資金・物資などの寄付仲介のニーズは高く、今後はより広く周知されるよう努力していきたい。



問16　今後、取り組んでいきたいことや問題の解決が必要となっている事柄　（n=289　複数回答）

1　団体・活動の立ち上げや運営・維持に関すること	75	26.0%
2　活動場所の確保や、活動で用いる施設・道具に関すること	66	22.8%
3　食材・食品の安全や食品衛生に関すること	73	25.3%
4　活動のための資金（補助金、助成金、寄付など）に関すること	175	60.6%
5　利用者に向けての広報、情報伝達に関すること	92	31.8%
6　ボランティアの募集や受け入れ、コーディネートに関すること	126	43.6%
7　食材・食品の寄付に関すること	116	40.1%
8　地域資源（自治会・町内会や学校、地元企業、社会福祉施設など）とのつながりに関すること	122	42.2%
9　特に問題などはない	16	5.5%
その他	7	2.4%
無回答	9	3.1%

「活動の実施にあたり、相談したり、連絡を取り合ったりできる『こども食堂』はいくつありますか」では、選択肢の中央値（「10 カ所以上」は「10」とみなす）を平均すると 3.3 だった。ただ、「10 カ所以上」が 9.7%ある反面、「なし」が 20.1%、「1 カ所」も 12.8%で、ばらつきが大きい。「活動を続けていくにあたって、今後、取り組んでいきたいことや問題の解決が必要となっている事柄」で「地域資源とのつながりに関すること」が 42.2%あったこともふまえ、団体相互の関係づくりや地域資源とのつながりづくりを支援することが求められている。

8. 《分析１》コロナ禍以前・以後の開始でどう違うか

活動の開始時期に応じた支援メニューが必要

- コロナ禍になってから活動を開始したグループ（全体の 34.7%）の方が、会食形式の食堂を実施している割合が有意に高い。
- コロナ禍の前からのグループは、コロナ禍による活動の制限への対処、コロナ禍以後のグループは、活動立ち上げに伴う資金などが悩みとなっており、それぞれに応じた支援メニューが求められる。

以上のアンケート結果を基に、回答団体を２つのカテゴリーに分けて比較する形の分析を行った。

《分析１》運営開始がコロナ禍の前（2019 年以前）か後（2020 年以降）か

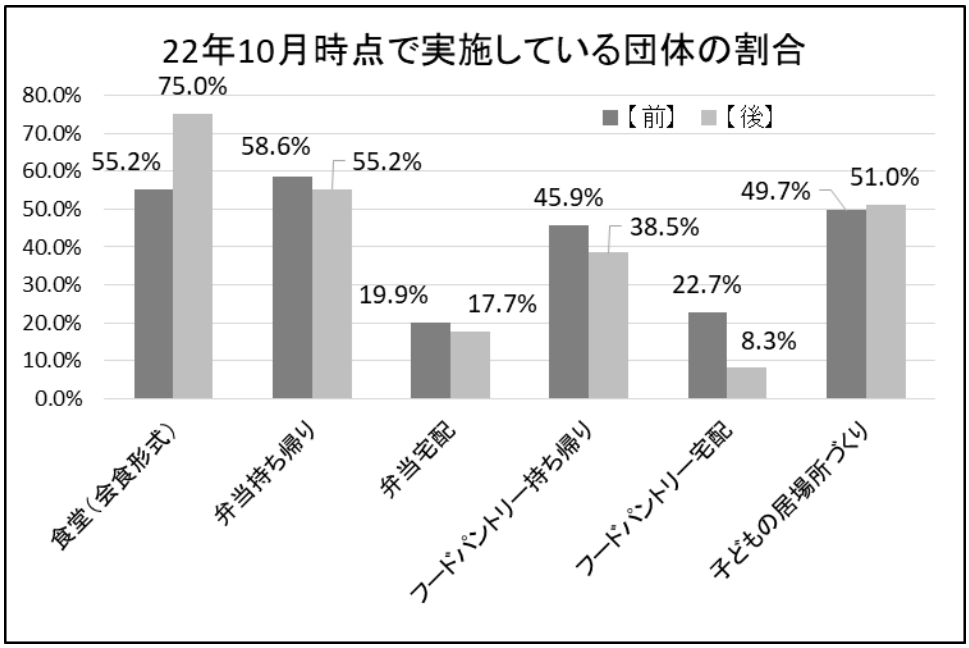
全有効回答数	289（開始時期不明＝12）	
【前】2019 年 12 月までに運営開始した団体数	181	65.3%
【後】2020 年 1 月以降に運営開始した団体数	96	34.7%

（問4・5）これまで「実施したことがある」活動と、2022年10月時点で実施している活動

	実施したことがある		2022年10月現在で実施	
	【前】181	【後】 96	【前】181	【後】 96
食堂（会食形式）	173(95.6%)	82(85.4%)	100(55.2%)	72(75.0%)
弁当持ち帰り	127(70.2%)	61(63.5%)	106(58.6%)	53(55.2%)
弁当宅配	50(27.6%)	21(21.9%)	36(19.9%)	17(17.7%)
フードパントリー持ち帰り	95(52.5%)	38(39.6%)	83(45.9%)	37(38.5%)
フードパントリー宅配	50(27.6%)	18(18.8%)	41(22.7%)	8(8.3%)
子どもの居場所づくり	126(69.6%)	54(56.3%)	90(49.7%)	49(51.0%)
活動を休止中	0(0%)	11(11.5%)	0(0%)	0(0%)

’22 年 10 月時点で実施している活動について尋ねた設問（問４・５）を分析すると、食堂（会食形式）はコロナ禍前から活動しているグループ（以下、【前】と表記）が 55.2%、

コロナ禍になってから活動を開始したグループ（以下、【後】と表記）が 75.0%で、【後】グループの方が有意に高かった（ｔ検定で p=0.0005)。弁当持ち帰りは【前】グループが 58.6%、【後】グループが 55.2%。フードパントリー持ち帰りは、【前】グループが 45.9%、【後】グループが 38.5%で、【前】グループの方が高かった。



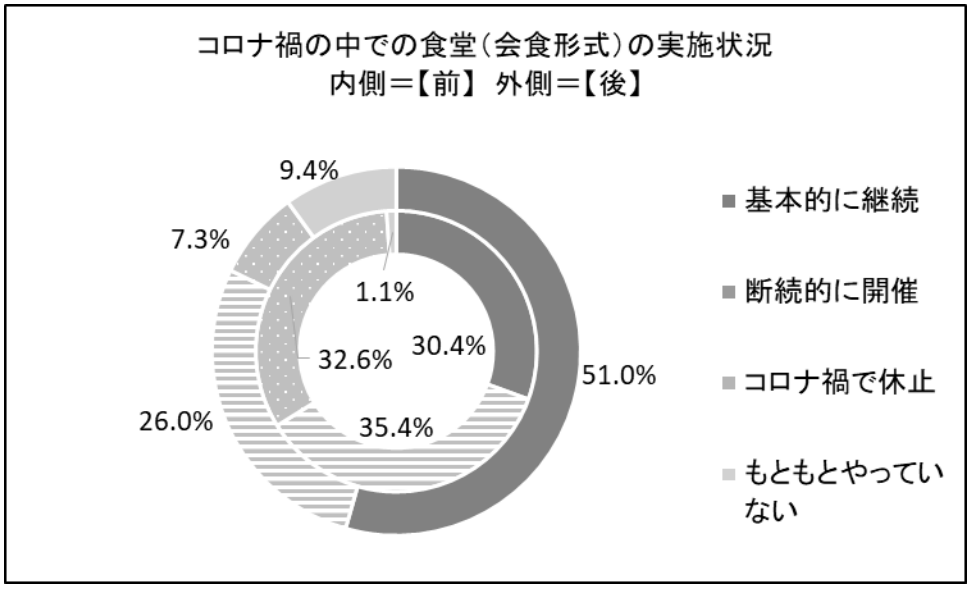
この数字から推測されるのは、①コロナ禍になってから活動を開始したグループの方が、会食形式の食堂を継続しようとする傾向が強い、②コロナ禍前から活動しているグループの方が、会食形式ができなくても、フードパントリーなどの形式で活動を継続しようとする傾向が強い、という点である。【後】グループはコロナ禍を前提として活動していることが、この差の背景にある。【前】グループも、会食形式の実施経験は 95%を超え、会食形式への志向が低いとはいえない。ただ、コロナ禍による運営の困難が直撃し、再開を阻む要因が【後】グループより多くなった結果と考えられる。

（問9）コロナ禍における食堂（会食形式）の実施状況

	【前】181	【後】96
基本的に継続	55(30.4%)	49(51.0%)
断続的に開催	64(35.4%)	25(26.0%)
コロナ禍で休止	59(32.6%)	7(7.3%)
もともとやっていない	2(1.1%)	9(9.4%)

コロナ禍での食堂活動の継続について尋ねた設問（問９）の分析では、「開催方法を工夫しながら、基本的に継続している」が【前】グループは 30.4%、【後】グループは

51.0%と、有意な差がみられた（p=0.0003)。「感染状況や緊急事態措置や自粛要請などの様子を見て、一時休止をしながら断続的に開催している」「集まって食事をする活動は休止となっている」は逆に【前】グループの方が多かった。注目すべきは「もともと、集まって食事をする活動は行っていない」で、【前】グループは 1%だったのが【後】グループは 9%（9 カ所）あり、コロナ禍の中、活動開始当初から弁当配布やフードパントリーなど食堂以外の形式に特化し、活動している団体もあることがわかった。

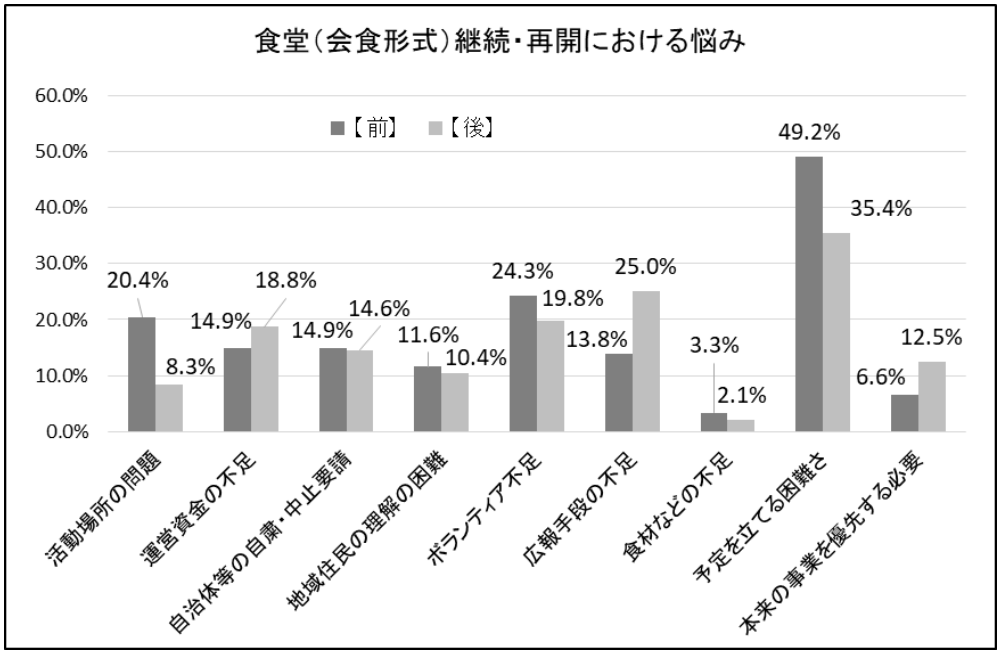


（問10）会食形式の「食堂」継続・再開にあたっての悩み

	【前】181	【後】96
会食のための場所が使えなくなるなど、活動場所の問題	37(20.4%)	8(8.3%)
コロナ対策のための費用など、運営資金の不足	27(14.9%)	18(18.8%)
自治体などからの自粛・中止の要請	27(14.9%)	14(14.6%)
地域住民の理解を得ることの困難	21(11.6%)	10(10.4%)
運営のためのボランティア不足	44(24.3%)	19(19.8%)
子どもたちに実施日などを知らせるための広報手段の不足	25(13.8%)	24(25%)
物資の寄贈が減ったことなどによる、食材などの不足	6(3.3%)	2(2.1%)
コロナの感染状況が日々変わり、予定を立てる困難さ	89(49.2%)	34(35.4%)
法人・団体などの本来の事業を優先する必要	12(6.6%)	12(12.5%)

会食形式の「食堂」継続・再開にあたっての悩みに関する設問（問 10）の分析では、【前】グループの方が高かった回答として「コロナの感染状況が日々変わり、予定を立てる困難さ」「会食のための場所が使えなくなるなど、活動場所の問題」があり、一方で【後】グループの方が高かった回答として「子どもたちに実施日などを知らせるための広報手段の不足」「コロナ対策のための費用など、運営資金の不足」などがあった。ここから考えられるのは、【前】グループは、コロナ禍によって活動に加えられた制限

への対応に苦労しているのに対して、【後】グループは、新たに活動を立ち上げた団体がもつ広報や資金の悩みなどを抱えているということだ。中間支援においても、こうした活動開始時点の違いによる団体の特性やニーズを踏まえ、より効果的な支援メニューを組み立てることが求められる。



（問11）会食形式の「食堂」を継続・再開するために必要だと思う点

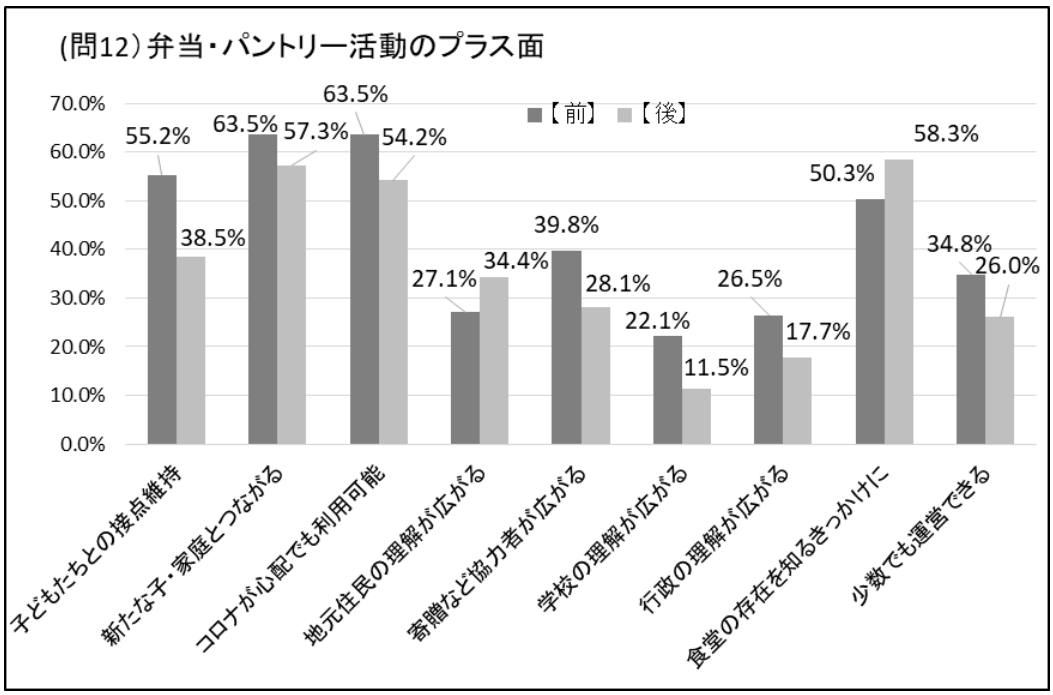
	【前】181	【後】 96
子どもたちからの要望	83(45.9%)	38(39.6%)
保護者や地域住民からの要望	61(33.7%)	36(37.5%)
スタッフ・ボランティアの協力	118(65.2%)	60(62.5%)
運営者が積極的に働きかけること	60(33.1%)	29(30.2%)
実施に関しての自治体の協力や理解	71(39.2%)	32(33.3%)
実施に関しての学校の協力や理解	70(38.7%)	40(41.7%)
食材の寄贈などの物的支援	76(42.0%)	45(46.9%)
助成金や寄付などの資金支援	92(50.8%)	64(66.7%)
交流会や研修などによる再開のための工夫などの情報	33(18.2%)	10(10.4%)

会食形式の「食堂」を継続・再開するために必要だと思う点についての設問（問 11）の分析では、【前】グループの方が高かった回答として「交流会や研修などによる再開のための工夫などの情報」「実施に関しての自治体の協力や理解」、【後】グループの方が高かった回答として「助成金や寄付などの資金支援」「食材の寄贈などの物的支援」がみられた。前の設問と同じく、【前】グループにはコロナ禍への対応のための情報や方策、【後】グループには活動立ち上げのための資金・物資についてのニーズがそれぞれ高く、ここでも支援メニューに反映する必要が感じられる。

（問12）弁当・パントリーの活動のプラス面

	【前】181	【後】 96
以前から利用していた子どもたちとの接点が維持できる	100(55.2%)	37(38.5%)
新たな子どもや家庭とつながることができる	115(63.5%)	55(57.3%)
コロナ感染を心配する保護者や子どもたちも利用できる	115(63.5%)	52(54.2%)
活動について地元住民の理解が広がる	49(27.1%)	33(34.4%)
物資の寄贈や助成金など、活動への協力者が広がる	72(39.8%)	27(28.1%)
活動について学校の理解が広がる	40(22.1%)	11(11.5%)
活動について行政の理解が広がる	48(26.5%)	17(17.7%)
「こども食堂」の存在を子どもや家庭が知るきっかけになる	91(50.3%)	56(58.3%)
スタッフ、ボランティアが少数でも運営できる	63(34.8%)	25(26.0%)

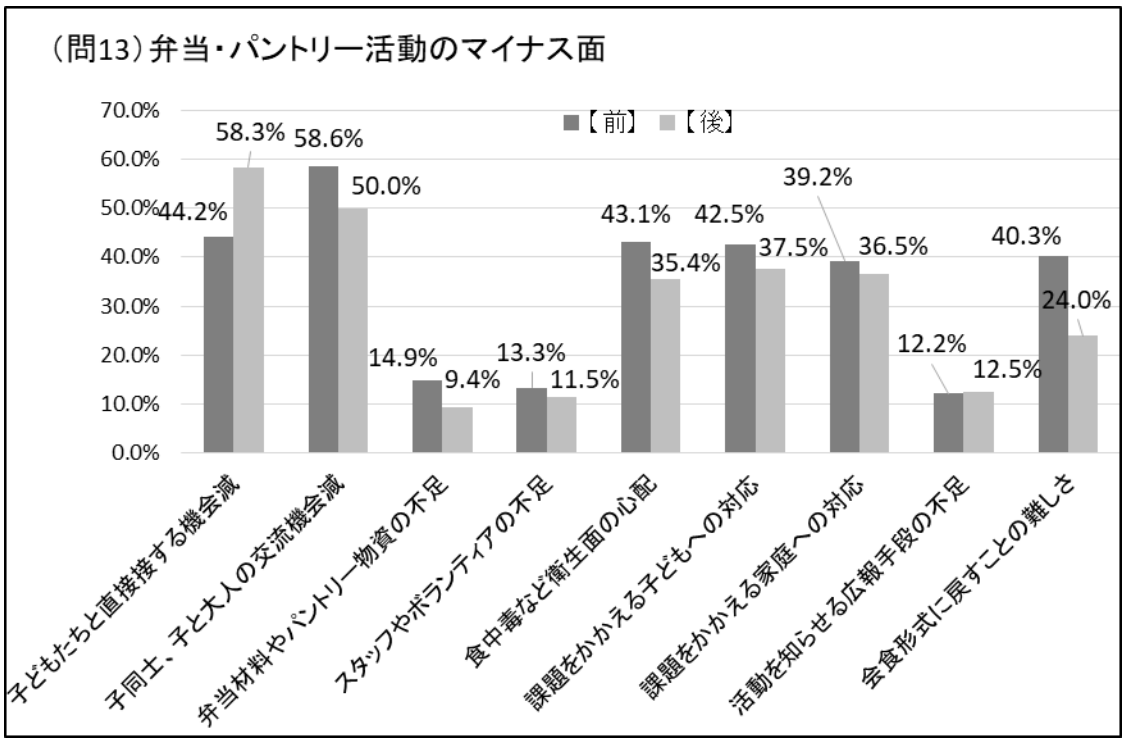
弁当配布・パントリー活動のプラス面についての設問（問 12）の分析では、【前】グループの方が高かった回答として「子どもたちとの接点が維持できる」「新たな子ども・家庭とつながることができる」「物資の寄贈や助成金など、活動への協力者が広がる」などがあった。とりわけ「子どもたちとの接点が維持できる」は【前】グループの過半数が選択し、【後】グループを 17 ポイントも上回った。会食形式での食堂活動が制限される中で、子どもたちとの関係を保つために弁当・パントリーを実施する苦労がにじみ出た。一方、【後】グループの方が高かった回答としては「地元住民の理解が広がる」「こども食堂の存在を知るきっかけになる」については、コロナ禍以降に活動を始めた団体の方が多く、活動立ち上げの段階での広報や地元理解に苦心しているようすがうかがえた。



（問13）弁当・パントリーの活動のマイナス面

	【前】181	【後】 96
子どもたちと直接接する機会が減る	80(44.2%)	56(58.3%)
子どもたち同士、子どもと大人が交流する機会が減る	106(58.6%)	48(50%)
弁当の材料やパントリー物資が不足する	27(14.9%)	9(9.4%)
スタッフやボランティアが不足する	24(13.3%)	11(11.5%)
食中毒など衛生面の心配	78(43.1%)	34(35.4%)
課題をかかえる子どもへの対応の難しさ	77(42.5%)	36(37.5%)
課題をかかえる家庭への対応の難しさ	71(39.2%)	35(36.5%)
活動を子どもたちに知らせる広報手段の不足	22(12.2%)	12(12.5%)
会食形式に戻すことの難しさ	73(40.3%)	25(26.0%)

一方、弁当配布・パントリー活動のマイナス面についての設問（問 13）の分析では、【前】グループの方が高かった回答として「会食形式に戻すことも難しさ」「食中毒など衛生面の心配」などがあり、【後】グループの方が高かった回答としては「子どもたちと直接接する機会が減る」などがあった。ただ、「子どもたち同士、子どもと大人が交流する機会が減る」は【前】グループの方が高く、ともに「直接的なかかわり」を会食形式の利点として認識しながらも、活動が長いグループは「子どもたち同士、子どもと大人との交流」に重きを置き、新しく活動を始めたグループは「子どもたちと直接接する」ことを重視している傾向が浮かび上がった。



9. 《分析２》「サポートおおさか」との関係でどう違うか

関係がある方が、相談できる「食堂」数は多い

- 活動について相談したり、連絡を取り合ったりできる「こども食堂」の数の平均は、こどもの居場所サポートおおさかと関わりのある団体が 3.7 カ所で、ない団体の 2.9 カ所に比べ有意に多かった。
- 問題の解決が必要となっている事柄については、食材や資金の寄付などについて、サポートおおさかと関わりのある団体の方が高く、ニーズの高さを示した。

《分析２》こどもの居場所サポートおおさかと関わりがあるか、ないか

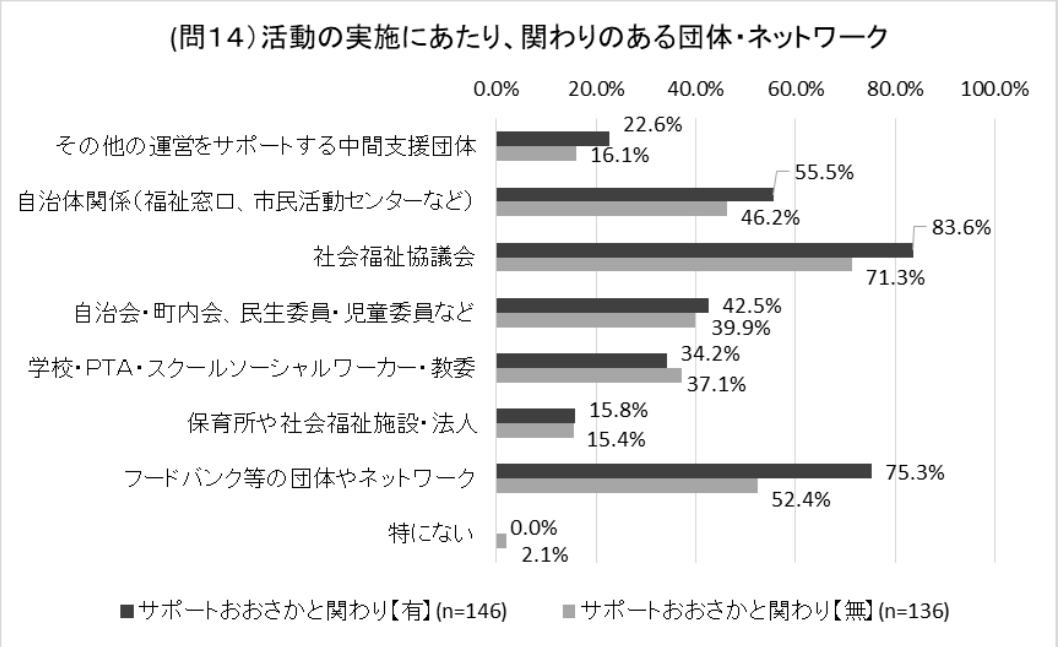
全有効回答数	289（無回答 7）	
【有】こどもの居場所サポートおおさかと関わりあり	146	50.5%
【無】こどもの居場所サポートおおさかと関わり無し	136	47.5%

（問15）相談したり、連絡を取り合ったりできる「こども食堂」の数

	【有】145(無回答1含まず)	【無】136
ない	26(17.9%)	32(23.5%)
1カ所	18(12.4%)	19(14.0%)
2～3カ所	52(35.9%)	45(33.1%)
4～9カ所	29(20.0%)	32(23.5%)
10カ所以上	20(13.8%)	8(5.9%)
中央値をもとにした平均	3.7	2.9

問 14 の「活動の実施にあたり、登録したり、関わりのある団体やネットワーク」を問う設問で「こどもの居場所サポートおおさか」を挙げたかどうかで、相談したり、連絡を取り合ったりできる「こども食堂」の数に差があるかどうかを調べた。その結果、回答の中央値（10 カ所以上は 10）の平均は「関わりあり」が 3.7 カ所、「なし」が 2.9 カ所で、有意な差が見られた（ｐ＝0.023）。特に「10 カ所以上」の割合が「関わりあ

り」グループは高く、研修や交流会の実施が、「食堂」同士のつながりづくりに効果を上げていると推測できる。



また、問 14 の回答についても「サポートおおさかと関わりあり」と「なし」に分けて集計したところ、「あり」のグループはフードバンク等の団体や社協、自治体関係などについても、関わりを持つ割合が高かった。このことから、子ども食堂は特定の団体にのみ関係をもつのではなく、広く活動への支援を得ようとしていると考えられる。

(問16)今後、取り組んでいきたいことや問題の解決が必要となっている事柄

	【有】	【無】
団体・活動の立ち上げや運営・維持に関すること	43(29.7%)	32(23.5%)
活動場所の確保や、活動で用いる施設・道具に関すること	35(24.1%)	30(22.1%)
食材・食品の安全や食品衛生に関すること	40(27.6%)	32(23.5%)
活動のための資金(補助金、助成金、寄付など)に関すること	100(69.0%)	73(53.7%)
利用者に向けての広報、情報伝達に関すること	44(30.3%)	47(34.6%)
ボランティアの募集や受け入れ、コーディネートに関すること	69(47.6%)	55(40.4%)
食材・食品の寄付に関すること	69(47.6%)	46(33.8%)
地域資源(自治会・町内会や学校など)とのつながりに関すること	60(41.4%)	58(42.6%)
特に問題などはない	5(3.4%)	10(7.4%)

今後取り組んでいきたいことや問題の解決が必要となっている事柄についての設問(問 16)を分析すると、「食材・食品の寄付に関すること」の項目が【有】グループの方が高かった。自由回答には「コロナ禍や物価高の下、要支援者が増加傾向にあり、継続支援を希望します」といった声もあり、「サポートおおさか」からの支援をきっかけにフードパントリー等の活動を拡大していこうという志向性がうかがわれる。

10. 寄せられた「声」から

・最後に記入してもらった自由意見の中から、「将来像・目指す姿」「運営での悩み」「コロナ禍における活動とは」「活動継続のために必要な支援」の４カテゴリーに分けて、具体的な声を紹介する。

１．「こども食堂」の将来像・目指す姿

- 「子ども食堂＝貧困」というイメージで、活動がしにくい。本当に困っている人は、遠慮して通えなかったり、食材をもらわなかったりする。人との触れ合いや、関係性、日頃からの関わり方、自分自身の立ち居振る舞いが、支援の要になると考えている。

- 子ども食堂は居場所としての役割が強くあると感じています。活動が長く深くなってくると、根本的な問題が見えてきます。今来ている子供達がなぜここに来るようなったか？　共稼ぎでないとやって行けない経済状況やシングルマザーが長時間働く事で、子供が家に１人で過ごす事になる等。安心して子供を産み、育てる事が出来ない今の日本の現象が大きく関与していると思います。僕達のような近所の世話焼きの大人だけでは追いつかない問題が、沢山あります。また支援する事で子供達の家庭の自立を妨げる事もあり、活動自体を考える時もあります。本来なら子供食堂などない世の中になって欲しいと願ってます。

- 福祉住宅集会所で子ども食堂を月に二回行っています。これは貧困対策というより、青少年の健全育成活動と思ってやってきましたが、今は、お弁当配布になり、子供達との関わりが薄くなって、大変残念です。　しかし、学校と連絡を取る中で、見守りが必要な特に手厚く接した方が良さそうな子達を対象に、勉強を見たり一緒に遊んだり、デザート作りをするような活動を行っています。課題ある子に接する機会もありますが、貧困対策で食べ物を渡せばそれですむ、と言うようなことではありませんので、家庭へ踏み込むのは大変難しいです。

- 他の子ども食堂と交流はありませんが、オンラインの交流会などに参加したり、活動を報告したりして、常に進化する子ども食堂を目指しています。また「子ど

も食堂はこどもを守る文化」の視点で「子どもたちのやる気、やりたいことを実現するシンポジムやコンサートなどを主催しています。

- 子ども達が暮らすそれぞれの小学校区単位で子ども食堂の設置が必要だと考えています。多くの方にこの活動を知ってもらい子ども食堂を必要とする子ども達とその保護者が安心して過ごせる居場所ができる活動を進めたいと思っています。
- 長期に渡り継続する中で、利用者が増加傾向にあり、キャパシティーの限界でお断りせざるを得ないこともあり心苦しい。子ども食堂の開催において、貧困家庭へのサポートも含め一人っ子・共働き家庭の子どもの孤食をせめて週一回は防ぐという目的を主としているが、最近、家事育児負担の軽減として利用する子育て中の母親が増加中。その方々の中にはレストランのように利用しているように見受けられる方もおられ、活動の意義を伝える努力をしながら、改めてその必要性を実感している。
- 子ども食堂と一言に言っても，多様化しているので､それぞれに目的を明確にして，その違いを理解してもらった上で，利用者並びに支援者に伝えていく必要がある
- 食事を提供することより、子どもの居場所作りを考えている。そして、この地域が子どもにとっての『ふるさと』
- 貧困家庭をイメージさせる「子ども食堂」のネーミングがとても嫌。当食堂を利用する家庭は、共働き家庭が多く、母親の家事が減り助かっているとのこと。また、ひとり親家庭でも料金が安いため喜んでくれている。
- 子ども食堂以外に、不登校の子どもの居場所になったり、お年寄りの方のサークル活動など、将来は幅広く地域のためにお役にたちたいと思う
- 地域によって考え方が違うので、「貧困」のことばを使わないでほしい。
- こども食堂には貧困イメージがあり､通わせづらい方がいるようです｡そのため､うちは食育系を前面に出して健康面、栄養面に配慮した内容で運営しています。
- 急激な物価高で利用者の増加に伴い、利用者層に変化が見られます。とにかく安価な弁当を求めるために、ママ友たちは結束して行列をつくる。私たちはお弁当屋ではない。

- 実施前に思い描いていた子ども食堂と実際のものがかなり違ってきた。やってみないとわからないことがある。継続することの大切さを痛感している。
- 活動を通じて地域のきずな、子どもたちの地域愛、またボランティアの楽しさ感じ取ってもらいたいと思っている。
- たくさん食材を確保したり、お弁当を配ることよりも、本当に必要としている子ども、年寄りにサポートできる団体として、時代の変化に合わせて活動していく
- 保護者の中に、こども食堂に子どもが来ていることを恥と考える方もいる。誰もが来れる場所にしたい。

２．「こども食堂」の具体的な運営における悩み

- 地域の居場所をもう少し安定して運営できるよう、地域の理解と協力をもっとひろげることが必要だと感じています。
- 子ども食堂に前向きに参加できないが本来必要な家庭の子どもや、ヤングケアラーに届けたいが、そのニーズを掘り起こすことが難しいです。
- 地域の方々に少しずつ認知されています。しかし、広報の仕方がなかなか難しく、又あまりたくさんの方が来られると、今度はスタッフが足りなくなります。広報と運営の在り方を悩んでいます。
- 当子ども食堂は、子どもだけでなく、一人暮らしの高齢者の方も一緒に会食しています。その中で、子どもが高齢者の方を労わることもあったり、高齢者の方が騒がしい中で嫌な顔もせず楽しく会食されています。問題を抱えている子どもは少ないですが、保護者の方からは子どもは楽しみにしているお声もいただいています。働くお母さんの支援が中心となっていると感じています。
- 行政がもっと協力してくれればと思う。
- 学校や地域と連携を取り、家庭を支えるネットワーク作りが必要である。
- 当団体は自治会などと連携して行なっていますが、自治会や諸団体、PTA の地域基盤の継続も旧態依然としたものでは難しいと考え、地域と共に新しい取組みを検討していますが、行政がより旧態依然としており、国の補助金の活用などをしていただけないことに困っています。

- 子供を支援していて時に途方に暮れる時があります。行政や国が現状を把握し協力、もしくは自ら運営して欲しいですね。
- もっと広く子供達保護者に告知できたら(なかなか子供が集まらない)小学校校長に面談してもらうが、個人情報保護の観点等により子供達と関わる事も出来ない。
- 子供食堂に携わってくださる方やボランティアの方、また地域の方々が、同じ思い、考え目的意識で、協力の精神で利他的な精神でできると、多くを成し遂げられるんではないかと、モヤモヤしています。
- 毎日、子どもの顔を見ることで家庭の中まで見えてきたように思う。毎日ボランティアに協力して頂くことにだんだんと肩身が狭くなる様な気がする。時々なら良いが、さすがに毎日無償というのは難しいと考えるようになった。
- 予約がひと月に入りきらず、次の月の予約になるほどはみ出すのが悩みです。
- 施設退所後のアフターケア以外にも地域には支援を必要としているひとり親家庭等繋がれる対象が多数あると思いますので、今後どのような取り組みを行っていくのか深めていきたい。
- 現在まで小学校、行政、地域と連絡を取り合ってスムーズに運営できていると感じている。児童数の減少が課題。
- 長期にわたって次世代へ続けていけたらと思う。学校の校長先生や教頭先生たちと相談報告できることはいいことだと思う。

３．コロナ禍の活動についての悩み・考えること

- コロナで活動がしにくくなったのは事実だが、その中でもできる形を考えてしている。以前にしていた学習や遊びの時間が取れないのが残念。
- コロナが一般の風邪等と同じように扱われるようになり、食堂形式の活動ができるようになれば良い
- 休止期間が長くなり、再開時期をいつにするか悩んでいる
- まだ多人数での会食には課題が沢山ありますが、少しずつ人数制限をしなければいけないですが集まって手作り体験など開催していきたいと思っています。

- お弁当があればその日の料理がいらない分助かっておられると思いますが、こども食堂がなすべきことかとコロナの間考えております。食事ができる以前に戻すことは難しく思います。
- お弁当にしてから 2 倍になり、今後会食に戻す為にどうしたものか考え中です。
- コロナ禍で改めて人との繋がりの大切さを感じ、子どもたちが元気な姿を見せてくれる喜びを感じることができています。今はまだ小さい子ども達が困った時、誰かに会いたくなった時、大きくなっても思い出してくれていつでも来れる場所であり続けるため継続することが大切だと思います。
- 食材を提供してもらえることで、こども食堂の運営が成り立っている。コロナ禍前は、一つの場所で大人数で食事を共にしていた。子どもたちの「今」のこの年代の時に暖かい雰囲気の中での食事体験は大きなものだと感じている。再びあの雰囲気に戻れるように色々と工夫を行っていきたいと思っている。
- 地域での交流の場作りをめざして、子ども食堂も開催しているが、コロナ禍の影響を考えると開催できない状況が続いている。法人の高齢者施設職員がスタッフとして従事しているので、高齢者の感染や重症化、クラスター発生のリスクを考慮すると開催が難しい
- コロナ前はこども食堂をにぎやかに実施することができ、普段一人で食事をしていたり、みんなでお鍋を食べる習慣のない子どもにも、貴重な時間の提供ができた。コロナにより食堂を中止すると、滞在して食事をすることは自宅からの距離や時間帯から難しい家庭でも、パントリー持ち帰りから自宅での食の支援が受けられるということで新たな出会いもあった。（コロナ禍ならでは）ニーズに合わせて形式を考えながら対応していく必要がある

４．活動継続のために必要な支援とネットワーク

- こども食堂の必要性は感じているが継続して運営していくためのパートナーが欲しい
- 中間支援団体様や社協、フードバンクにとてもお世話になっています。助成金やボランティアを増やし活動を続けるために努力したいと思います。
- 大阪市内では野菜の提供がほぼないのでスーパーで購入していますが、物価高騰により資金の圧迫がある。

- 「コロナ禍や物価高」の下、要支援者が増加傾向にあり、「食材等の寄付、寄贈」の継続支援を希望します。
- 食材をいただけると大変助かります。ボランティアですが家賃光熱費もかかり大変です。
- 子どもをとりまく課題について、学習や研修を重ねることで継続への意欲と活動の質への社会的な視点を深め合っていければいいと思う
- 他の食堂さんとの交流（問題の解決に向けて参考になるような）をコーディネートできるのは、サポートおおさかさんだろうと思います。
- 食材の提供や寄付が広がってきて、とてもありがたいです。人的資源とそれを支える一定の資金の継続支援が求められる
- 横との繋がりがほしい
- どこまで関わっていくか。個別支援が増えるほど大変になってくる。食材などこういう支援がなくなった時が不安になる。今でも家賃払いながらみんなボランティアでやっているが、コスト厳しい。
- 現在、社会福祉協議会に全面的にバックアップしてもらって行っている。行政にも施設等の利用や人的支援もしてもらっている。担当者が変わることにより、今後支援が継続してもらえるか心配である。
- 食材などすべてが高くなり赤字が増えるばかりです。
- 子ども食堂を地域住民に定着できるように、資金・運営費の補助金・助成金をより気軽に申請し、活動を継続できるようになれたらと思う。
- 定期的に運営している子ども食堂のほとんどが、ボランティアによって成り立っている。助成金も自治体によって差があり、資金面では支えられているが……。今後継続できるかは不明。国の予算で運営できればよい。
- 運営が難しく、資金や人材に困っている
- 多様な子ども団体・子ども食堂がネットワークを作り、みんなで活動するような仕組みをできないか考えている。とりあえず、子ども食堂のグルーピングから始めたのですが、行政の協力が欲しい。もちろん、全国的な子ども食堂支援も。
- 市・府が今まで以上に積極的に関わって援助してほしい

- 継続していくためにも、自治体や学校関係などのつながりや協力は必要不可欠。もっと行政の支援が必要だと思う。
- 「食べる」場を 2016 年から加えたことで、「食」が子どもの生きるベースとして基本になることを実感させられた。食材費や場所代などお金がかかるので、市の助成金がなければ立ち行かないのが現状。大学生ボランティアがコロナで来れなくなり、スタッフ不足が苦しい。今年度、大阪府からのお肉券、お米券の支援、レトルト食品の支援助かった。コロナ禍で、しんどい家庭がさらにしんどくなっている感じ
- 小学校やＰＴＡの多大なる協力、活動のための資金、食材。食費の寄付などの支援のおかげで活動がスムーズに行われて、子どもや保護者に喜ばれている。
- 多くの企業や団体に助けてもらってありがたい。今後子どもたちにいい結果として現れるよう見守りたい。

11. 「子ども食堂」中間支援のこれから

2020 年から 2022 年の 3 年間のヒアリング、アンケート調査をもとに、子ども食堂の活動を支える中間支援に何が求められているかをまとめた。

① それぞれの「子ども食堂」のコンセプト・スタイルの尊重

食事の提供を中心に活動していたり、地域での交流やつながりづくりを目指して活動していたりと、それぞれ目的や思いが違う。貧困対策とひとくくりにされることに対する懸念については、ヒアリング調査やアンケート調査の自由記述からも現れている。担い手も活動スタイルも違うことを踏まえて、中間支援団体はそれぞれの在り方を尊重することが求められる。

② 活動実態に合った、物資・食材の提供

コロナ禍以降は活動日数や食数、会食形式からフートパントリーまで活動形態は多岐にわたっている。支援の仕方についても一律に支援をするのではなく、それぞれの活動実態にあったサポートの在り方を検討していくことが求められる。

③ 個別支援・家庭支援に対する専門的な支援

コロナ禍以降「子ども食堂」を開設した団体が 3 割以上を占めたことは、コロナ禍だからこそ子どもたちの「居場所」「意欲」「交流」「参加」のために「子ども食堂」が必要とされていることを浮き彫りにしている。また、コロナ化で顕在化した困難に対しての「支援」も、「子ども食堂」の大きな役割となっており、社会福祉の視点をもった支援のサポートが一層求められている。

④ 「子ども食堂」同士の横のつながりづくり

相談したり、連絡を取り合ったりできる「子ども食堂」がない、と回答した「子ども食堂」が全体の 2 割になっている現状から、孤立しながら運営をしている様子がうかがえる。今回のアンケート調査を通じて、中間支援団体である子どもの居場所サポートおおさかの登録申し込みが数件あった。研修や交流会の機会を通じて、「子ども食堂」同士が知り合いになるサポートが求められている。

⑤ 中間支援団体のネットワークづくり

中間支援団体にも物資提供を得意とするところや、助成金などの資金提供が得意な団体までそれぞれ特色がある。サポートおおさかとつながっている「子ども食堂」の 7 割は他のフードバンク等の団体やネットワークらの支援も受けていることを考えると、中間支援団体は自らの強みを明確にして、中間支援同士のつながりをつくり、「子ども食堂」を量的にも質的にも底上げしていくことが求められる。

アンケート調査票（Ａ３両面に印刷）

大阪府内のこども食堂の現状と課題に関するアンケート調査 2022

こども食堂の名称（　　）

問1　活動に取り組んでいる方は、次の中のどれですか。あてはまるもの1つに〇をつけてください。

1　町会・自治会などの地域団体
2　任意団体（法人格をもたない）
3　特定非営利活動法人（NPO法人）
4　一般社団法人
5　社会福祉法人
6　個人
その他　（　　）

問2　活動拠点の所在地を記入してください。（大阪市・堺市は区まで）　（　　）市・町・村（　　）区

問3　「こども食堂」などの活動を始められたのはいつですか。　（　　）年（　　）月

問4　「こども食堂」などの活動（主な対象は子どもとしますが、大人も対象に含んでかまいません）で、過去・現在問わず、実施したことのあるものすべてに〇をつけてください。

1　食堂（集まって食事をする会食形式）
2　弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）
3　弁当宅配（家庭に届ける形式）
4　フードパントリー持ち帰り（食材などを取りに来てもらう形式）
5　フードパントリー宅配（食材などを家庭に届ける形式）
6　子どもの居場所づくり（学習支援など）
その他　（　　）

問5　「こども食堂」などの活動で、2022年10月の時点で実施しているものすべてに〇をつけてください。

1　食堂（集まって食事をする会食形式）
2　弁当持ち帰り（取りに来てもらう形式）
3　弁当宅配（家庭に届ける形式）
4　フードパントリー持ち帰り（食材などを取りに来てもらう形式）
5　フードパントリー宅配（食材などを家庭に届ける形式）
6　子どもの居場所づくり（学習支援など）
7　活動を休止中
その他　（　　）

問6　上記の「こども食堂」などの活動の1回あたりの提供食数は、コロナ禍の前と比べてどう変化しましたか。2022年10月の時点で、あてはまるもの1つに〇をつけてください。

1　減った
2　ほぼ同じ
3　増えた
4　実施していない、休止中
その他　（　　）

問7　上記の「こども食堂」などの活動を通して、子どもたちにどんな変化があったと考えられますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1　食べることに対して興味・関心が高まった
2　一緒に食べる楽しさを味わえた
3　活動（こども食堂など）の手伝いをするようになった
4　家で手伝いをするようになった
5　生活のリズムがついてきた
6　栄養改善につながった
7　自分や家庭の話をするようになった
8　家や学校で「こども食堂」の話をした
9　友人を「こども食堂」に連れてきた

その他　（　　）

問8　「こども食堂」などの活動を通して、子どもや保護者によい変化があったと思われるエピソードを教えてください。

問9　2020年以降の「コロナ禍」の中で、「食堂（集まって食事をする会食形式）の活動」をどのように行ってきたか、あてはまるもの1つに〇をつけてください。

1　開催方法を工夫しながら、基本的に継続している
2　感染状況や緊急事態措置や自粛要請などの様子を見て、一時休止をしながら断続的に開催している
3　コロナ禍で、集まって食事をする活動は休止となっている
4　もともと、集まって食事をする活動は行っていない

問10　「食堂（集まって食事をする会食形式）の活動」継続・再開にあたって、どんな悩みがありましたか、またはありますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1　会食のための場所が使えなくなるなど、活動場所の問題
2　コロナ対策のための費用など、運営資金の不足
3　自治体などからの自粛・中止の要請
4　地域住民の理解を得ることの困難
5　運営のためのボランティア不足
6　子どもたちに実施日などを知らせるための広報手段の不足
7　物資の寄贈が減ったことなどによる、食材などの不足
8　コロナの感染状況が日々変わり、予定を立てる困難さ
9　法人・団体などの本来の事業を優先する必要

その他　（　　）

問11 「食堂（集まって食事をする会食形式）の活動」継続・再開するために必要だと思う点について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1 子どもたちからの要望
2 保護者や地域住民からの要望
3 スタッフ・ボランティアの協力
4 運営者が積極的に働きかけること
5 実施に関しての自治体の協力や理解
6 実施に関しての学校の協力や理解
7 食材の寄贈などの物的支援
8 会場の確保
9 助成金や寄付などの資金支援
10 交流会や研修などによる再開のための工夫などの情報

その他　（　　）

問12 弁当やパントリーの活動のプラス面と考えられる点について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1 以前から利用していた子どもたちとの接点が維持できる
2 新たな子どもや家庭とつながることができる
3 コロナ感染を心配する保護者や子どもたちも利用できる
4 活動について地元住民の理解が広がる
5 物資の寄贈や助成金など、活動への協力者が広がる
6 活動について学校の理解が広がる
7 活動について行政の理解が広がる
8 「こども食堂」の存在を子どもや家庭が知るきっかけになる
9 スタッフ、ボランティアが少数でも運営できる

その他　（　　）

問13 弁当やパントリーの活動のマイナス面と考えられる点について、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1 子どもたちと直接接する機会が減る
2 子どもたち同士、子どもと大人が交流する機会が減る
3 弁当の材料やパントリー物資が不足する
4 スタッフやボランティアが不足する
5 食中毒など衛生面の心配
6 課題をかかえる子どもへの対応の難しさ
7 課題をかかえる家庭への対応の難しさ
8 活動を子どもたちに知らせる広報手段の不足
9 集まって食事をする会食形式に戻すことの難しさ

その他　（　　）

問14　活動の実施にあたり、登録したり、関わりのある団体やネットワークなどはありますか。次の中であてはまるものすべてに○をつけてください。

1　こどもの居場所サポートおおさか
2　団体の設立や運営、活動をサポートする中間支援団体（1以外）
3　自治体関係（福祉などの窓口、市民活動センター、ボランティアセンターなど）
4　社会福祉協議会
5　自治会・町内会、民生委員・児童委員などの地縁組織
6　学校・PTA・スクールソーシャルワーカー・教育委員会
7　保育所や社会福祉施設・法人
8　フードバンク等、食材・食品の寄付を仲介する団体やネットワーク
9　特にない

その他　（　　）

問15　活動の実施にあたり、相談したり、連絡を取り合ったりできる「こども食堂」はいくつありますか。次の中であてはまるもの1つに○をつけてください。

1　1カ所ある
2　2カ所から3カ所
3　4カ所から9カ所
4　10カ所以上
5　相談したり、連絡を取り合ったりできる子ども食堂はない

問16　活動を続けていくにあたって、今後、取り組んでいきたいことや問題の解決が必要となっている事柄は何ですか。次の中であてはまるものすべてに○をつけてください。

1　団体・活動の立ち上げや運営・維持に関すること
2　活動場所の確保や、活動で用いる施設・道具に関すること
3　食材・食品の安全や食品衛生に関すること
4　活動のための資金（補助金、助成金、寄付など）に関すること
5　利用者に向けての広報、情報伝達に関すること
6　ボランティアの募集や受け入れ、コーディネートに関すること
7　食材・食品の寄付に関すること
8　地域資源（自治会・町内会や学校、地元企業、社会福祉施設など）とのつながりに関すること
9　特に問題などはない

その他　（　　）

最後に、このアンケートや子ども食堂活動に関するご意見などを自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

２０２２年度子ども食堂団体ヒアリング調査報告書

コロナ３年、新たな挑戦へ　持続し、増え続ける子ども食堂

2023年１月発行

発行／一般社団法人こどもの居場所サポートおおさか

〒557-0034　　大阪市西成区松１－２－７